

津阪東陽 『杜律詳解』 訳注稿 (七)

二宮俊博

本稿には、津阪東陽『杜律詳解』巻中の「嚴中丞枉駕見過」詩から「九日」詩までを収める。原文の「メ」は「シテ」に、「」は「コト」に、「尸」は「トモ」にそれぞれ改めた。明らかに訓点脱落していると思われる箇所には、これを補った。また詩句の左傍にところどころ施されている和訓は、※をつけて改行して示した。書き下し文は、紙幅の都合で省略する。なお、詩題の上には便宜的に通し番号を施した。

- 041 嚴中丞枉駕見過
- 042 江上值水如海勢聊短述
- 043 奉酬嚴公寄題野亭之作
- 044 嚴公仲夏枉駕草堂兼携酒饌得寒字
- 045 秋尽
- 046 野望
- 047 聞官軍收河南河北
- 048 涪城县香積寺官閣
- 049 送路六侍御入朝
- 050 又送辛員外
- 051 九日

杜律詳解卷之中

伊勢津阪孝綽君裕著

男達有功校

041 嚴中丞枉駕見過

嚴武以_二御史中丞_ヲ尹_ニ成_都。以_二世舊_ヲ待_シ公_ヲ、訪_ニ浣花_ノ草堂_ヲ。枉_ハ猶_レ屈_レ也。公自註嚴自_ニ東川_一除_ニ西川_ニ、勅_{シテ}令_ニ兩川_ノ都節制_ヲ。案_{スルニ}先_レ是_レ蜀分_ニ東川_一置_ニ兩節度_ヲ。上_二元二_一年、合_ニ兩川_一爲_ニ一_道ト、廢_ニ東川_ノ節度使_ヲ、以_ニ嚴武_ヲ爲_ニ成_都、尹_ト、充_ニ劍南_ノ節度使_ニ總_ニ鎮_之ヲ。

(注1) 『旧唐書』杜甫伝に「嚴」武、世旧を以て甫を待すること甚だ善し」と。なお、嚴武(七二六〜七六五)については、訳注稿(一)、「詩聖杜文貞公伝」の(注39)参照。

(注2) 例えば、『字彙』に「枉、軀往の切、汪、上声。屈也」と。

(注3) 顧宸『註解』に「上元二年(七六一)十月、崔光遠卒す。十一月、劍南東西兩川を合して一道と爲し、東川の節度使を廢して、嚴武を以て成都の尹と爲す。故に中丞と曰ふ。此の詩、宝應元年(七六二)の作」と。宇都宮遼庵の両著にも挙げる。

(注4) 「二」点、原文は誤って「三」点に作る。

嚴武は御史中丞の肩書で成都尹となり、代々のよしみで公を待遇し、浣花の草堂を訪うた。「枉」は、屈とほぼ同じ。公の自注に「嚴、東

川自り西川に除せられ、勅して両川都節制たらしむ」と。案ずるにこれより先、蜀は東川・西川を分け、両節度使を置いた。上元二年、両川を合して一道とし、東川節度使を廢して、嚴武を成都尹とし、劍南節度使に充て、これを統治させた。

元戎小隊出二郊垆^二 問^レ柳^ヲ尋^テ花^ヲ到^二野亭^二

※小隊：スコシノトモ 到：タチヨル

詩^ノ小雅^ニ元戎^十乘[、]以先啟^ク行^ヲ。元大也。戎ハ兵車也。元戎ハ猶^レ言^フ將軍^ト也。元戎出^レ必大隊、言^フ小隊^ト者ハ、因^テ遊覽^ニ來過^ス、故^ニ減^シ儀從^ヲ隊兵^少シク隨^フ爾。問^レ柳^ヲ尋^テ花^ヲ、即途中遊覽之興。城外^ヲ曰^フ郊、郊外^ヲ曰^フ垆^ト。蓋^シ以^テ節鎮之貴^ニ而枉^ニ駕^ヲ於^レ郊村^ニ、故^ニ若^ク非^ニ特^ニ過臨^{スルニ}然也。抑^ク亦厚意眷顧、不^ニ有^テ誇張^セ也。

〔注5〕『詩経』小雅・六月。朱子の集伝に「元は大なり。戎は戎車なり」と。

薛益『分類』（卷二、尋訪）に「戎は兵車なり」までを挙げる。『分類』は、宇都宮遷庵の増広本に引く。

〔注6〕ちなみに、『白氏六帖事類集』卷十五「大将」の条及び卷二十一「節度使」の条に、それぞれ「元戎」の語を挙げる。

〔注7〕『而庵説唐詩』（卷十八）に「元戎の出づる必ず大隊なり。小隊と言ふは出でて客を拜す。簡便に従ふ」と。

〔注8〕『唐詩貴珠』（卷十六、雅事酬贈一）に「嚴公遊覽するに因つて、故に儀従を用ひず、小隊を用て相隨へ、柳を問ひ花を尋ねて来たる」と。

〔注9〕『而庵説唐詩』に「邑外を郊と曰ひ、郊外を垆と曰ふ」と。もとは、『爾雅』積地に「邑外之を郊と謂ひ、郊外之を牧と謂ひ、牧外之を野と謂ひ、野外之を林と謂ひ、林外之を垆と謂ふ」とあるのによる。邑は、国都の意。なお、薛益『分類』には「爾雅」を挙げる。

『詩経』小雅に「元戎十乘、以て先づ行を啓く」と。〈元〉は、大である。〈戎〉は、兵車である。〈元戎〉は、將軍と言ふのとはほぼ同じ。〈元戎〉が〈出〉る場合、必ず大がかりな隊列であるのだが、〈小隊〉と言ふのは、遊覽のためにやって来たので、それゆえ儀衛の数を減らして隊兵が少人数だけ随行するのだ。〈柳を問ひ花を尋ぬ〉は、途

中での遊覽の興にほかならない。城外を〈郊〉といい、郊外を〈垆〉という。けだし節度使という高い地位にありながら、〈駕を枉げ〉て郊外の村にやって来たのは、ことさらにわざわざ出向いたというだけではないようである。そもそもやはり嚴武の厚意眷顧をあえて誇張したくないのであろうか。

川合^ニ東西^ヲ瞻^ニ使節^ヲ 地分^ニ南北^ニ任^ニ流萍^ニ

蜀、一名川。嚴武初鎮^ニ東川^一、至^レ是^ニ尹^ト成都^ニ、合^テ東西兩川^ヲ爲^テ一節度^ト領^ス之^ヲ。故^ニ曰^フ三川^合東西^一。美^ニ其總^ニ鎮^{スルヲ}全蜀^一也。瞻^ハ使節^ヲ言^フ蜀人瞻^ニ仰^{スルヲ}其威望^ヲ也。地分^ニ南北^ヲ言^フ蜀與^ニ長安^一南北遠隔^ヲ。任^者分付^之謂^也。此句公自嘆^ス、身飄^ニ零^ニ南中^一、而不^レ能^ニ北歸^一、任^ニ其流轉^不定^ヲ、如^ク浮萍^之漂^{カレ}水^ニ耳。

〔注10〕ちなみに、『夜航詩話』卷三に「平衍の田野を川と曰ふ」とし、蜀中を川と称するものも、その義を取ったもので、「岷江・沱江・黑水・白水の四大川を取り、以て名と爲すを謂ふは、蓋し後世の説のみ」と指摘する。後出、046「野望」詩の〔注17〕参照。

〔注11〕顧宸『註解』に「公の自註に、嚴、東川自り西川に除せられ、勅して両川の都節制たらしむと。武初めて東川に鎮たるを以ての故なり。是の時、両川を合して一道と爲す、故に〈川東西を合す〉と曰ふ」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

〔注12〕『積大典』詩語解』卷上に、「任意」「一任」「任」「信」「信任」の用例を挙げて、「皆分付之辭、不^レ妨之辭、同用ス」という。「分付」は俗語で、言いつける意。

〔注13〕『唐詩貴珠』に「君已に両川を合して節鉞を瞻るを得、独り憐れむ我に南北の分有り、北に帰ること能はず、南地に飄零して、其の流転すること萍の如き耳」と。南中は、蜀を指す。初唐の王勃「蜀中九日」詩（『唐詩選』卷七）に「人情は已に南中の苦を厭ふ」と。訳注稿（六）、031「野老」詩の〔注13〕参照。

蜀は、一名を〈川〉という。嚴武は当初、東川を鎮したが、ここに至つて成都尹となり、東西両川を合せて一節度使の管轄としてこれ

を領した。それゆえ（川東西を合せて）という。蜀全土を統治して
いることを称えているのである。（使節を贈る）は、蜀の民人がその
威望を仰ぎ慕うことを言うのである。（地南北に分かる）は、蜀と長
安とが南北に遠く隔っていることを言う。（任）は、分付するの意。
この句は、公が自らを嘆じたもので、身は南中に流浪零落し、北に
帰ることができず、浮萍が水に漂うように、その流転して定まらぬ
のに任せているのだ。

扁舟不_レ獨如_ニ張翰_一 皂帽應_ニ兼_テ似_ニ管寧_一

晉書_ニ張翰_ハ會稽_ノ人_一。賀循_ニ赴_レ命_ニ入_レ洛_ニ、經_ニ吳_一、閭門_ヲ、於_ニ船
中_ニ彈_レ琴_ヲ。翰_初ヨリ不_レ相識_ニ、乃_就循_ニ言_ク談_ス、便_ニ大_ニ歡悅_一。問_レ
循_ニ知_ニ其_一入_レ洛_ニ、翰_便同_{シテ}舟_ヲ即_去。魏志_ニ管寧_ハ漢_ノ魏_ノ之際_ニ、避_レ
亂_ラ依_ニ公孫度_ニ、居_ニ遼東_ニ三十年、好_テ坐_ニ一_藜牀_一、當_レ膝_ニ處_ニ皆
穿_ツ。常_ニ著_ニ皂帽_一布_ヲ裙_ヲ而已_一。此承_ニ地_ノ分_ノ句_ヲ、言_ニ己_一之_レ萍踪_一。其
始_テ入_レ蜀_也、原如_ニ張翰_一一時起_レ意_ヲ趁_テ人_ノ扁舟_ヲ入_レ洛_ニ。倉卒
之_レ舉_、自_レ貽_ニ悔恨_一。今乃_レ不_レ能_レ歸_ヲ、竟_ニ如_ニ管寧_一寓_ニ于_ニ遼東_一、
皂帽_布裙_、窮_困自_守上_ルカ也。胡燮_亭云_、公避_レ亂_ヲ入_レ蜀_ニ、當_レ日_ニ原_質
質_然不_レ暇_ニ遠_ク慮_ニ、遂_ニ匏_繫不_レ歸_ヲ、坐_ニ消_ニ歲_月一_ヲ、資_レ志_ヲ以_テ
歿_ス。其誤_ニ在_ニ入_レ川_ニ一_擧、所_ニ以_ニ深_ク悔_ル也。案_ニ張翰_ハ季鷹_、
是_ニ羽翰_一之_レ翰_、平聲。今用_テ作_ニ仄聲_一、後人遂_ニ襲_レ之_一。故_ニ劉辰翁_一
云_、翰_{不_ニ平聲_一據_レ之_ニ。蓋_ニ自_ニ此詩_一創_レ用_レ之_ニ也。}

(注14)

『晋書』卷九十二、文苑伝に「張翰、字は季鷹。吳郡吳の人。父の儼
は呉の大鴻臚。翰は清才有り、善く文を属す。而して縦任拘せず。時人
号して江東の歩兵と為す。会稽の賀循、命に赴き洛に入り、呉の閭門を
経、船中に於いて琴を弾ず。翰初め相識らず、乃ち循に就きて言譚す。
便ち大いに相欽悦す。循に問い其の洛に入るを知る。翰曰く、吾れも
亦た北京に事有り。便ち同載して即ち去り、而して家人に告げず」と。
東陽が挾つたのは、薛益「分類」もしくは「唐詩貫珠」で、これらは
いづれも張翰を会稽の人とする。『庵説唐詩』も同じ。吳郡吳県は、
今の江蘇省蘇州市。会稽は、今の浙江省紹興市。

(注15) 薛益『分類』に見える。管寧の伝は、『三国志』魏書卷十一。『分類』
は、宇都宮遜庵の両著にも引く。

(注16) 『唐詩貫珠』に、(注13)に挙げた箇所に続いて「此の聯、東西南北を
以て句脈と為し相貫く。下半界、皆此を承け而して己が萍踪を言ふ」と。
萍踪は、浮草暮して一箇所に定住しないこと。

(注17) 『唐詩貫珠』に、(注16)に挙げた箇所に続いて「其の始めて川に入る
や、原と張翰が一時意を起して他人の扁舟を趁つて洛に入るが如く一
般。今、里に帰ること能はざること、竟に管寧の久しく遼東に隠るるが
如し矣」と。一般は、同様の意。

(注18) 『唐詩貫珠』に「按ずるに、公の川に進む諸什、当日原とより質貿然と
して南邁し、深く險阻に入る。故都を廻首するに、中興恢復の際、預聞
すること能はず。坐に歲月を消し、志を賣して以て歿す。皆悞は川
に入る一挙に在るに因る」と。質貿然は、軽はずみなさま。賣は、齋の
俗字。齋志は、志を抱いたまま。梁・江淹「恨みの賦」(『文選』卷十六)
に「志を齋して地に没し、長く懐いて已むこと無し」とあり、五臣注に
「齋は、持なり」と。

(注19) 『論語』衛靈公篇に「人遠き慮り無ければ、必ず近き憂ひ有り」と。

(注20) 『論語』陽貨篇に「吾れ豈に匏瓜ならんや。焉んぞ能く繋がれて食ら
はれざらんや」とあるのに基づく語。清・劉宝楠の正義に「匏瓜食らは
れざるを以て、一処に繫滞するを得。後に匏繫を以て羈滞を謂ふ」と。
匏瓜は、ヒヨウタン。

(注21) 劉辰翁(須溪)については、訳注稿(三)、008「賈至舍人早に大明宮に朝
するを奉和す」詩の(注29)参照。その注は、『集千家註批点杜工部集』
(卷八)に見える。

ちなみに、釈六如(慈周)の『葛原詩話』卷三に「晋張翰之翰、平
去二声」の条あり、「張翰字ハ季鷹ナレバ、羽翰ノ翰ニテ平声ナルヘシ。
故二楊基カ詩ニ、黄金何_ヲ用_ニ鑄_ニ范蠡_一、紫萼本_ト自_足張翰_一ト。正ク
寒韻ニ用ユ。然_レニ杜詩ニ扁舟不_ニ獨_一、如_ニ張翰_一、皂帽必_ニ兼_テ似_ニ管
寧_一、劉須溪カ評_ニ、翰不_ニ音平_一擧_レ之_ト。羽翰ハ定_テ平声_一、詞翰ハ定_テ
去声_一。タゞ張翰ニ至_テハ杜詩ニ擧_レテ去声_ニ用_ルモノ多シ。然_レトモ楊
孟載ニ擧_レハ、平声ニモ用ユヘキナリ。石湖ノ句ニ、思婦意決_ス吾_レ張翰_一、
贈別情深_ニ子_一繞朝、コレ杜詩ノ如シ」といふ。

明の楊基（字は孟載、号は眉庵。一三二六―一三七八）の作は、七律「雲間の謝嘉と同一張夢辰舟に書す」詩（『眉庵集』巻八）の頸聯。石湖は、南宋の范成大（字は致能、号は石湖居士。一一二六―一九三三）のこと。その二句は、七律「黃必先主簿同年の贈別の韻に次す」二首其一（『石湖居士詩集』巻八）の頸聯。

なお、東陽の『葛原詩話糾謬』巻三には「杜詩又た云ふ、邵平元と漢に入り、張翰後に呉に帰すと。亦た仄声に作る」と。これは五言古詩「南岳を過ぎて洞庭胡に入る」詩（詳註巻二十二）の第二十一、二句。

『晋書』に「張翰は会稽の人。賀循が君命により洛陽に赴く途中、呉の閭門を経由し、船中で琴を弾じた。張翰はそれまで面識はなかったが、そこで賀循のもとを訪れ語り合ったところ、たちまち大いに話がはずんで気にいった。賀循に問うて入洛すると知るや、張翰はそのまま一緒に同じ舟で即刻でかけた」と。『魏志』に「管寧は漢魏の際、戦乱を避けて公孫度のもとに身を寄せ、遼東に居ること三十年、好んで藜（あひく）の寝台に坐して、膝のあたるところはすべて穴があいた。いつも卓帽（黒い帽子）に布裙（木綿の袴）を身につけていた」と。これは（地分）の句を承け、己が浮草暮しを言う。その始めて蜀に入ったのは、もとより（張翰）が一時に思い立って人の（扁舟）を追って入洛したごとくで、咄嗟の軽はずみな行動に、悔恨を残している。今では帰ることもできず、ついには（管寧）が遼東に仮寓し、（卓帽）に布裙という粗末な身なりで、困窮のうちに自ら節を守ったごとくである。胡熒亭が云う、「公は戦乱を避けて蜀に入ったのだが、その時はほんやりとして深く先のことまで考える暇なく、かくしてぶらさがった匏（かぶ）のように留まったまま帰るに帰れず、歳月を無駄に過ぎ、果たせぬ志を抱いたまま没した。いずれも誤まりは（川）に入りし一挙にある」と。深く悔やむゆえんである。案ずるに張翰は、字が季鷹であるから、これは羽翰の翰で平声。今ここで仄声として用いているが、後人はそのままこれを踏襲している。されば劉辰翁が云う、「翰が平声でないのは、これに拠る」

と。けだしこの詩から用い始めたのであろう。

寂寞^{タル}江天雲霧^ハ裏^ニ 何人^カ道^ニ有^ト少微星^一

道、言也。少微星^{注22}ハ在大微垣^ハ西^ニ、一名處士星。故^ニ公自比^ス。身既^ニ爲^ル隱士^ト、僻^ニ居^{シテ}寂寞^ノ濱^ニ、深^ク藏^ル于雲霧^中、猶^ニ少微^ノ之星、天曇^テ不^カレ見^ル。能有^ト何人^ノ認識^ス。嚴公乃^チ以^テ兩川^ノ節度^ノ之貴重^ヲ、不^レ遐^ク棄^セ寂寞^ノ之故人^ヲ。公深^ク感^ズ其厚誼^ヲ也。以^テ少微星^ヲ自居^シ、是高世絕俗^ノ之人、亦見^ル傲岸^ノ氣象^ヲ。

〔注22〕 薛益「分類」に「隋書」天文志を引いて、「少微の四星は大微垣の西に在り、士大夫の位なり。一名、処士星。明黄なるときは、則ち処士挙げらる」といふ。「唐詩貫珠」も同様の注。「分類」は、宇都宮遼庵の増広本にも挙げる。

〔注23〕 『而庵説唐詩』に「此の詩は是れ公が嚴公の兩川節度使の貴重を以て寂寞の故人を忘れざるを顯はすを要するなり」と。遐棄は、遠ざけ見捨てる。「詩経」周南・汝墳に「既に君子を見る、我を遐棄せず」と。

〔注24〕 氣象は気性のあらわれ。訳注稿(三)、012「曲江」二首其一の（注9）参照。

〈道〉は、言である。〈少微星〉は、大微垣の西にあり、一名、処士星という。されば公自ら比す。我が身は隱士となつており、〈寂寞〉たる江辺に引つ込んで、深く〈雲霧〉の中に隠れており、ちょうど〈少微〉の〈星〉が、空曇つて見ることができないのと同じで、いつたい〈何人〉がしかと覚えていてくれようか。嚴公にはなんと兩川の節度使という貴く重い地位にありながら、〈寂寞〉たる境遇の昔なじみを見捨ててはいない。公は深くその厚誼に感じ入っているのである。〈少微星〉を自認しているのは、世俗を超越したはずの人で、そこにやはり傲岸の氣象が見てとれる。

042 江上值^三水如^キ海勢^ノ聊短述^ス

江^ハ即^シ錦江^ニ。短述^ハ謂^フ不^レ能^ク述^ル其大^{ナル}者^ヲ。顧註^ニ題云^テ値^ト水如^キ海勢^ノ、篇中不^レ言^フ海勢^ヲ、聊短述^ス而已^ト。水檻^ノ一聯[、]正^ニ是

短述也。

(注1) 邵宝『集註』(卷二十二、述懷類)に「江は、錦江」と。宇都宮遯庵の両著にも挙げる。

(注2) 顧宸『註解』に「題に水の海勢の如くなるに値ふと云いて、篇中海勢を言はず、聊か短述するのみ。水檻の二句、正に是れ短述するなり。宝応元年(七六二)の作」と。宇都宮遯庵の両著にも挙げる。

〈江〉は、すなわち錦江。〈短述〉は、その大なるものを述べることでできないこと。顧註に「詩題に〈水海勢の如きに値ふ〉と云うが、篇中には〈海勢〉について言わず、〈聊か短述す〉るのみだ。〈水檻〉の一聯は、まさしく〈短述〉したものである」と。

爲_レ人_レ性_レ僻_レ 耽_レ佳_レ句_二 語_{不_レハ}驚_レ人_ヲ死_シトモ_{不_レリ}シ_レ休_マ

僻_ハ偏也。言_ニ與_レ人_異ヲ_也。死_トモ_{不_レハ}休_マ極_言其_{弗_レレハ}得_{弗_レレハ}措_也。是_下句_解上_句ヲ、自_下狀_下其_{耽_レ佳_レ句_ニ之}情_上ヲ。憶_昔自_ニ負_シ詩_才ヲ、不_レ屑_ト尋_常之_語ヲ。其_{耽_レ佳_レ句_ニ之}甚_シキ、必_欲驚_レ人_ヲ、不_レ得_{不_レレ}己_マ。自_盡死_力ヲ_求レ_テ、殆_欲嘔_レ出_心肝_一ヲ、何_ソ其_性之_僻ナル_也。然_トモ_此皆_少壯_時之_事、今_嘆其_{不_レ能}大_述ト_{コト}也。

(注3) 薛益『分類』(卷一、述懷)に見える。宇都宮遯庵の両著にも挙げる。

(注4) 『中庸章句』第二十章に「思はざること有り、之を思ひて得ざれば措かざるなり」と。

(注5) 顧宸『註解』に「語人を驚かさざれば死すとも休まず」は、自ら其の佳句に耽るの癖性を状す。次の句、上句を解く法」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注6) 『書言故事』卷十一、詩類に「錦囊」の語を挙げ、中唐・李賀(七九〇〜八一六)の故事を引くが、そこに李賀の母が「是の児、心肝を嘔吐して乃ち已む」と嘆いた言葉が見える。これは晩唐・李商隱(八一二〜八五八)の「李賀小伝」に基づき、それには「是の児、要_カず_カ当_ニ心_ヲを嘔吐して始めて已まん爾」とある。なお、「李賀小伝」については、原田憲雄『李賀歌詩編I』(平凡社東洋文庫、一九九九年)に訳注がある、

(注7) 顧宸『註解』に、(注5)に挙げた箇所が続いて「然れども此れ皆少壯の時の事。少壯の時に在って、謂へらく此の癖性、死すとも雖も休まず、

意はざりき老い去つて詩篇_太だ然らず、只だ渾て漫興のみ。佳句に耽る時を回想するに、必ず人を驚かすの語を作さんと欲す、何ぞ其れ癖なる」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。少壯は、三十代までの若く元気な時。

〈僻〉は、偏である。他人と異なることを言うのである。〈死すとも休まず〉は、そのどうしても得ないではおれない心情を極言している。これは下句が上句の意を解説し、自らその〈佳句に耽る〉ありさまを形容している。憶えば昔は詩才を自負し、尋常の語を用いるのをいさぎよしとしなかつた。その〈佳句に耽る〉ことの徹底ぶり、何がなんでも〈人を驚か〉そうとして、得るまでやめることができず、自ら死力を尽くしてこれを求め、ほとんど心肝を嘔き出ださんばかりであった。なんとその〈性〉の〈僻〉なることか。さりながら、これはいづれも年若く意気軒昂だった時のことで、今では大いに〈述〉べることができないのを嘆じているのである。

老去詩篇渾渾漫興 春來花鳥莫深愁_ト

※渾渾漫興…ミナヤリバナシ 莫深愁…サノミナキツカイセソ

漫_ハ浪漫也。莫_ハ深_ク愁_ト從_ニ花_鳥一_說、言_レ不_レ復_足畏_ト也。二句

嘆_シ老_來詩_興不_レ競_、以_ニ海_勢之_難一_レ狀_シ、自_恥才_退之_甚一_也。花

鳥_ノ句_申言_ス漫_興、且_與驚_レ人_ヲ對_映。蓋_當時_佳句_不唯_驚人_ヲ、以_三狀_ス物_精微_、寫_二透_ス其_形神_一、花_鳥亦_所愁_シ也。今

乃_老衰_、才_力兩_ナ落_、率_レ意_ニ信_セテ_口ニ_、平_平無_レ奇_、只_渾渾_漫興_而已_{。無}復_著意_於驚_レ人_ヲ、則_刻畫_シ萬_物之_情狀_ヲ、使_レ不_レ得_レ道_ト于_吾之_筆下_ニ、何_ヲ以_復能_再レ_シ之_哉。甚_シ矣_吾之_衰也。漫_興一_作漫_興。言_ニ漫_然隨_レ意_ニ付_與一_也。東_坡山_谷誠

齋_襲三_用之_、俱_ニ押_テ入_レ韻_ニ。已_上四_句意_一貫_、與_三片_花飛_滅却_春同_格。爲_三五_六述_二瑣_事一_、先_有此_嘆也。

(注8) 薛益『分類』に見える。宇都宮遯庵の両著にも挙げる。浪漫は、できあせ気ままの意。

〔注9〕顧宸「註解」に「深く愁ふること莫かれとは、花鳥従り説く。甚だ奇なり」と。宇都宮遯庵の両著にも挙げる。

〔注10〕邵傳「集解」に「春花春鳥、爾が形神を写透することを愁ふること母かれ」と。

〔注11〕薛益「分類」に「渾て漫興とは、復た意を人を驚かすに著けること無きを言ふなり」と。宇都宮遯庵の増広本に挙げる。

〔注12〕顧宸「註解」に、〔注9〕に挙げた箇所が続いて「万物の情状を刻画して、吾が筆下に通ること得ること無からしむ、此れ亦た花鳥の深く愁ふる所なり」と。宇都宮遯庵の両著にも挙げる。

〔注13〕『論語』述而篇に「甚だしいかな、吾れの衰ふるや。久しいかな、吾れ復た夢に周公を見ず」と。

〔注14〕錢注（卷十一）及び輯註（卷八）は「興」に作るが、仇兆鰲（一六三八～一七一七）の詳註（卷十）は「興」に作り、「黄鶴本及び趙次公註は皆（漫興）に作る。韻府群玉に此の詩を引き、亦た（漫興）に作る。王介甫詩に、粉墨空しく多く真に漫興、蘇子瞻詩に、手を袖にし筆研を焚く、清篇真に漫興と。皆相證す可し。諸家、前題の漫興九首に拠って、遂に此れを併せて亦た（漫興）に作る。上聯に（句）字有り、次聯に又た（興）字を用ふ、宜しく去声を置見すべからず」という。

『韻府群玉』は、宋末元初の陰勁菘（字は時夫）撰の韻書。その巻九、上声語韻に「謾興」の語を挙げ、その注に蘇軾の句例を引き、「杜詩に謾興九首有り、大率花柳に対するの興を言ふ」と。王介甫は、北宋の王安石（字は介甫。一〇二一～一〇八六）のこと。荆国公に封ぜられたので王荆公ともいう。その句は「純甫、釈惠崇が画を出だして予に詩を作らんことを要む」詩（『臨川先生文集』卷一）。蘇子瞻は、北宋の蘇軾（字は子瞻。号は東坡居士。一〇三七～一一〇一）のこと。その例は「正甫表兄の江行して桃花を見るに次韻す」詩（『蘇文忠公合註』卷三十九）に見える。

この仇兆鰲の説を踏まえて、釈六如は『葛原詩話』卷一「漫興」の条に、

漫興ト云ハ常ノコトナリ。又漫興ト云字アリ。王荆公題「惠崇画」詩二、粉墨空々多々真々漫興、東坡詩二、袖手焚筆研、清篇真々漫興ト。杜詩「老去詩篇都々漫興、一本作「漫興」。仇注定テ與

トス。注曰、老レハ則詩境漸々熟ス、但随テ意ニ付与スト。と述べ、これに対して、東陽は更に資料を補い、『葛原詩話糾繆』卷一において、

杜詩、絶句漫興九首、全唐詩注に冷齋夜話を引いて云ふ、（漫興）、当に（漫興）に作るべし。即景率意の作を言ふなり。蘇軾・黄庭堅・楊万里、之を襲用し、俱に押して韻に入る。元以前未だ読みて（興）字と為す者有らず。楊廉夫始めて漫興七首を作り、妄りに云ふ、杜を学ぶと。其の徒、呉復従つて之を傳會す。是に於いて世人、杜集の（興）を改めて（興）と為す。

という。『全唐詩』は卷二七に見え、（夜話）を（詩話）に作る。あるいは東陽は「冷齋詩話」という書物がないことから、それを北宋・釈惠洪（字は覺範。一〇七一～一一二八）撰の「冷齋夜話」の誤りと見たのであるうか。但し、それには当然ながら、かかる記述はない。

ところで、明末清初の朱彝尊（号は竹垞。一六二九～一七〇九）の「韻府群玉の後に書す」（『曝書亭集』卷四十三）には、次のような記述がある。

杜工部集に漫興五言絶句九首有り。又た七言に云ふ、老去つて詩篇渾て漫興、春来花鳥深く愁ふる莫かれと。（漫興）とは、即景口占率意にして作るを言ふなり。其の後、蘇子瞻・黄魯直・楊廷秀の諸公、皆之を襲用し、押して上声語韻に入る。姜堯章の蟋蟀詞に云ふ、幽詩漫興、咲ふ籬落燈を呼ぶ、世間の兒女。段復之の詞に云ふ、詩句一春渾て漫興、紛紛たる紅紫俱に塵土と。陰時夫、韻府群玉を輯する、亦た采りて語字韻中に入る。蓋し元自り以前は読みて漫興と為す者有ること無し。楊廉夫、漫興七首を作るに迫んで、妄りに謂ふ、杜を学ぶ者、先づ其の情性言語を得るに、必ず漫興自り始むと。而して其の弟子呉復従つて之を傳會し、注に云ふ、漫興なる者は、老杜、浣花溪に在りて作る所なり。漫興の言はる、蓋し眼前の景に即きて、以て漫成の辞と為す。其の言語、村なるに似たり、未だ始めより俊ならざるは、此れ杜体の最も学び難き者と。廉夫の詩出でて自り、世人遂に尽く杜集の旧を改め、興を易へ興と為せり矣。『全唐詩』の注は、これに拠つたのであろうか。

ちなみに、（漫興）の用例は、北宋の黄庭堅（字は魯直、号は山谷。一

○四四〇(一三〇)には見い出せない。南宋の楊万里(字は廷秀、号は誠齋。一一二七〜一二〇六)のそれは、韻字ではないが、「晩に側溪山下を過る」詩(『誠齋集』卷二十六「江西道院集」)に「一路詩篇渾渾漫與側溪端的相虧けず」と見える。南宋の姜夔章(名は夔、号は白石道人。一一五五〜一二二二)の「蟋蟀詞」は「丙辰の歳、張功父と張逢可の堂に会飲す。屋壁の間、蟋蟀の声有るを聞く」云々の自序を付した「齊天樂」詞(『白石道人歌曲』卷三)のこと。段復之は、金の段克己(字は復之、号は遯齋。一一九六〜一二五四)のこと。その「漁家傲」詞六首其五に見える(『遯齋樂府』)。また楊廉夫は、元末明初の楊維禎(字は廉夫、号は鉄崖。一二九六〜一三七〇)。その「漫興」詩七首は、「鉄崖樂府」卷十に収む。呉復(字は見之)には、「雲槎稿」があるが、未見。

なお、先に挙げた「韻府群玉の後に書す」とほぼ同じ一文が朱彝尊の『靜志堂詩話』卷二、張孟兼の条にも見え、伊勢山田の東夢亭(名は斐、字は伯傾。一七九六〜一八四九)の『鉅雨亭隨筆』卷下(『日本詩話叢書』第五卷)には、それを挙げる。

(注15) ちなみに、張遠『会粹』(卷九)に「前の四句一意」と。宇都宮遯庵の詳説に挙げる。

(注16) 訳注稿(三)、012「曲江」二首其一。

《漫》は、浪漫である。《深く愁ふる莫かれ》は、《花鳥》の側から説き、もう二度と畏れるに足りないことを言うのである。二句は、《老》いてより《詩興》の振るわないことを嘆じ、《海勢》の名状しがたいことから、自ら才能の衰退が甚だしいのを恥じているのである。《花鳥》の句は、《漫興》を引き伸ばし、かつ《人を驚かす》と対応反映している。ただし、そのかみは《佳句》が《人を驚かす》したばかりでなく、事物を形容するのに精緻微細にその形状と精神とを写し出し、《花鳥》もやはり《愁》えたものであったが、今ではなんと老衰し、才能力量ふたつながらとんと衰え、思いつくまま口から出まかせで、平々凡々と何の奇もなく、ただ《渾渾漫興》なるのみだ。もはや《人を驚かす》のに留意することはない。さすれば万物のありさまを鏤刻して、我が筆下から逃れ得ないようにさせるな

ど、どうしてこれを再びできようか。ひどいものだ私の老衰よりは、というのである。《漫興》は、一に《漫興》に作る。漫然と気ままに付与することを言う。蘇東坡・黄山谷・楊誠齋がこの語を襲用し、ともに押韻の箇所用いている。以上の四句は意味が一貫しており、「一片花飛びて春を減却す」と同格。五六句で瑣事を述べるために、まずこの嘆きがあるのだ。

新添ニ水檻ヲ供レ垂ルニ釣ヲ 故著ニ浮槎ヲ替レ入ニ舟ニ

※檻：テスリ。浮槎：イカダ

檻ハ柵也。於ニ水際ニ爲レ之。故ニ曰ニ水檻ト。公居枕江ニ、岸上爲テ欄障ヲ以防ニ人ノ墜墮ニ爲レ之。蓋舊、有所レ設、今因テ水大ニ溢ニ、又別ニ設レ之。故ニ曰ニ新添ト。川上之人、因ニ雨水漲ニ、垂レ釣ヲ多獲ニ鰻鱺魚ヲ。此句蓋其事也。是誠ニ區區タル小事、亦惟漫興而已。故ハ舊也。著ハ猶ハ繫、也。平常豫シメ備、故ニ曰ニ故著ト。槎ハ枯木也。替ハ代也。入ハ謂ニ挈テ家ヲ載ル之。公貧シテ不能レ備ト舟ヲ、設レ槎ヲ以代レ之。若宅或ハ漂没、欲ニ乗テ以避レ難也。浮木載レ家ヲ危シ矣。亦不レ得レ已之計耳。其窮如レ是、那ヲ得シ才思不レ落、噫。

(注17) 輯註(卷八)に「公、草堂に水檻有り。蓋し水際に之を爲る」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注18) 『旧唐書』杜甫伝に「(杜)甫、成都の浣花里に于いて、竹を種え樹を植え、廬を結び江に枕む」と。『漢書』嚴助伝に「北枕大江」とあり、唐・顔師古の注に「枕は、臨なり」と。

(注19) 邵偉『集解』に見える。

(注20) 邵宝『集註』及び薛益『分類』に見える。『分類』は宇都宮遯庵の増広本に、『集註』は詳説に挙げる。

(注21) 邵宝『集註』及び薛益『分類』に見える。『分類』は宇都宮遯庵の増広本に、『集註』は詳説に挙げる。

《檻》は、柵である。水際にこれを作るので、《水檻》という。公の住まいは江に臨んでおり、岸上に手すりを作って人が落ちるのを防

いだ。けだし、もとから設けてあったのだからが、今、〈水〉が大いに溢れてきたので、さらに別に設けるのである。それゆえ〈新たに添ふ〉という。川べりに住む人は、雨で増水すると、〈釣を垂れ〉て多く鱧や鯪魚を獲る。この句は、けだしそのことであろう。これはまことにちまちまとした些事で、やはりただ〈漫興〉なるのみだ。〈故〉は、旧である。〈著〉は、繫とほぼ同じ。常日頃あらかじめ備えているので、〈故と著く〉という。〈槎〉は、枯木である。〈替〉は、代である。〈入る〉は、家族を引き連れて載せること。公は貧しくて舟を備えることができず、〈槎〉を用意して代用した。もし自宅が流され水没するようなはめになれば、それに乗って避難しようとするのである。浮木に家族を載せるのは危険だが、やはりやむを得ない措置なのだ。その困窮ぶりはかかる具合であつて、どうして才能や詩思が衰えずにいられようか、ああ痛ましいことだ。

安得思如陶謝手上 令渠述作與同遊

陶謝ハ陶潛謝朓。渠ハ彼也。公値江水如海勢、不レ可無ハ英雄篇驚人者。獨奈年老才退、聊且短述而已。安得才思雄膽如陶謝之輩、令其對此壯觀、則豪興勃發、必逞大手筆、渾涵汪洋、亦如海勢。不惟驚人、殆泣鬼神矣。我與之同遊、共其愉快、爲樂何如哉。

〔注22〕 〈安〉字、錢注（卷十一）及び輯註（卷八）は（焉）に作る。輯註は、宇都宮遯庵の増広本に引く。

〔注23〕 ここは、陶潛（三六五〜四二七）と謝靈運（三八五〜四三三）。杜甫がこの二人を並称した例として、他に「夜、許十損が詩を誦するを聴き愛して作る有り」詩（詳註巻三）に「陶謝枝梧せず、風騷共に推激す」という。枝梧は、逆らう意。風騷は「詩経」の「国風」と「楚辞」の「離騷」。また「張十二山人彪に寄す三十韻」詩（詳註巻八）に「謝氏山を尋ぬる展、陶公酒を漉する中」、「石櫃閣」詩（詳註巻九）に「優游たり謝康楽、放浪す陶淵明」と見える。

このうち、最初に挙げた「許十損が詩を誦するを聴く」詩は、吉川幸

次郎「杜甫詩注」第一冊に、これを載せ、「なお謝靈運は當時すでに大家として公認されていたが、陶淵明は必ずしもそうでない。しかるに杜は陶に傾倒すること、のちいくつかの詩でも示される。また北宋の旧注が、〔謝〕をもつて、謝靈運のみならず、その従弟謝惠連、また斉の謝朓、あわせていわゆる〈三謝〉とするのは、宋人の意識であつても、杜の意識ではあるまい」と説く。なお、明人の注、邵傳「集解」には「玄暉・靈運・惠連の輩」と注し、薛益「分類」も同様。玄暉は、謝朓（四六四〜四九九）の字。

ちなみに、杜甫を始め盛唐の詩人による六朝の詩人評価について論じたものに、伊藤正文「盛唐の詩人と前代の詩人―盛唐における文学論の一面―」（『中国文学報』第八冊、第十冊。後に『建安詩人とその伝統』収録。創文社、二〇〇二年）がある。特に陶淵明の評価や受容に関して、李劍鋒「元前陶淵明接受史」（『齐鲁書社』、二〇〇二年）及び劉中文「唐代陶淵明接受研究」（『中国社会科学出版社』、二〇〇六年）があり、吳懷東「杜甫与六朝詩歌研究」（安徽教育出版社、二〇〇二年）の第四章第二節「唐人陶謝并称の詩学意義」には、初唐の王勃や盛唐の李白が陶淵明と謝靈運とを併称し並べて論ずる例を挙げる。その他、杜甫の陶淵明理解については、安東俊六「杜甫研究」（『風間書房』、一九九六年）の第三章第七・八節に、これを論じて、それが不徹底であつたとする。

〔注24〕 元来は、詔勅その他の国家の重要文書をいう。例えば、『晋書』王珣伝に「珣、人の大筆の椽の如きを以て之に与ふるを夢む。既に覚め、人に語りて云ふ、此れ当に大手筆の事有らん」と。ここでは、すぐれた詩文の才をいう。

〔注25〕 『新唐書』杜甫伝贊に「〔杜〕甫に至つて、渾涵汪洋、千彙万状、古今を兼ねて之を有す」と。渾涵は、すべてを包みこむさま。双声語。汪洋は、広々としたさま。汪洋と同じ。韻量語。

〔注26〕 訳注稿(一)、006「鄭十八虔の台州司戸參軍に貶せらるるを送る」詩の詳解に「真に詩家の聖人、以て鬼神を泣かしむ可し」と。その〔注29〕参照。

〔陶謝〕は、陶潛・謝朓。〈渠〉は、彼である。公は〈江〉の〈水〉が〈海勢の如きに値〉い、雄篇の〈人を驚かす〉作がなくてはならぬはずなのに、いかにせん年老い才衰え、〈聊か〉まずは〈短述〉す

るのみだ。どうかして才思の雄大で豊贍なる(陶謝)のごとき輩を得て、この壮大な眺めに向き合わせれば、豪放な興趣がむらむらと起こり、必ずや大手筆を逞しくして、すべてを包みこみ広々と際限なくし、やはり(海勢)のごとく、ただ(人を驚かす)のみならず、ほとんど鬼神を泣かさんばかりになるだろう。自分ばかりの人々と(同遊)し、その愉快さを共にしたなら、楽しさはいかばかりであろうか。

043 奉酬嚴公寄題野亭之作上

嚴武寄題。杜一錦江ノ野亭ニ曰、漫ニ向テテ頭ニ把釣竿ヲ、懶ニ眠シテ沙草ニ愛ス風湍ヲ、莫倚ノコト善ク題ニ鸚鵡賦ヲ、何須シ不レ戴ニ駿驥冠ヲ、腹中ノ書籍幽時ニ曬シ、肘後ノ醫方靜處ニ看シ、興發シテ會ク能騎ニ駿馬ニ、終ニ須シ直ニ到ニ使君灘ニ。一ニハ言ニ其放浪閑適之況ヲ。三四ハ直ニ諷之ヲ矣。鸚鵡賦ハ借テ禰衡カ事ヲ、刺シ其狂傲ヲ。唐書本傳ニ武與甫世舊、待遇ニ甚隆ナリ。甫放恣ニシテ無ニ器度ニ。嘗憑レテ醉ニ登ニ武林ニ、瞪ニ視ニ武ヲ曰、嚴挺之乃有此兒。武雖ニ急暴ト、不ニ以爲ニ忤コトヲ。蓋指ニ是類ニ耳。駿驥冠ハ以ニ駿驥ノ毛羽ニ飾レ冠ヲ。漢侍中之冠。以三公嘗テ爲ニ近侍之臣用レ之ヲ。公傲誕、武過ニ其宅ニ、有レ時不レシテ冠ニ而見ユ。亦見ニ本傳ニ。故ニ詩及レ之ニ。兩句言其文章驚レモ人ヲ、不レ空ニ恃テオラ狂傲ナル、即遊ニ方之外ニ、何爲ニ不ニ冠巾ニ而見レ人ニ耶。亦親友、閑賣弄ニ相諍ヘル也。五六言ニ其幽事ニ、兼テ贊ニ博學ヲ。驪ハ腹中ノ書ヲ用ニ郝隆カ事ヲ。肘後方ハ葛洪カ所著ス醫書ナリ。結言ニ乘シテ興ニ而出ハ、幸ニ復來訪ニシト。公愛レズ騎コトヲ馬ニ、數ク見ニ公ノ詩ニ。其稱ニ能騎ニ駿馬ニ、贊ニ老テ而尚善ヲ馭ニスルヲ、亦兼テ寓ニ嘲意ヲ也。使君灘ハ在ニ蜀ノ魚腹縣ニ。楊亮爲ニ益州ト、經レテ此ヲ而舟覆、俗稱ニ爲ニ使君灘ト。借テ言ニ節度使ノ城府ヲ。蓋以ニ其近レ水ニ也。公ノ詩通篇酬ニ答嚴ノ詩ニ。或解レ嘲ヲ、或ハ承認シ、或暗ニ答ニ其意ニ、須下先玩ニ原唱ヲ、乃知中ノ所レ和ヘル之旨ヲ、

故ニ具ニ擧テ而詳ニス之ヲ。

(注1) 『唐詩貫珠』(卷十六、雅事酬贈一)に「一二は、其の放浪の意を言ふ。三四は直ちに之を諷す矣」と。

(注2) 「鸚鵡の賦」は、『文選』卷十三に載せる。『集千家注』(卷八)に「後漢の禰衡、字は正平。氣、剛傲を尚ぶ。好んで時を矯し物を慢る。曹操を見て數しば恣言有り。操、忿を懷く。然れども其の才名を以て之を殺すことを欲せず。送つて劉表に与ふ。表、之を重んず。衡、復た毎に表を慢る。表、容るる能はざるを恥ちて、江夏の太守黃祖が性急なるを以て、故に衡を送つて之を与ふ。祖も亦た善く待す。祖が長子射、章陵の太守爲り、尤も衡に善し。射、時に大いに賓客を會す。人の鸚鵡を獻する者有り、射、厄を衡に挙げて曰く、願はくは先生之を賦して佳賓を娛しませよと。衡、筆を攬つて文を作る、点を加ふること無し。辞采甚だ麗なり。後、黃祖大いに賓客を會す。衡が言、遜順ならず、竟に之を殺す」と。宇都宮逸庵の両著にも挙げる。なお、禰衡の伝は、『後漢書』文苑伝に見える。

ちなみに、杜甫が自らを禰衡に比した例として、
・使者顔闔を求むるも、諸公禰衡を厭ふ
・「敬んで鄭諫議に贈る十韻」詩、詳註卷二)

・徑ちに劉表に依らんと欲す、還た疑ふ禰衡を厭はんかと
(「郭中丞が太僕卿を兼ね、隴右節度使に充てらるるを送り奉る」詩、詳註卷五)

と見え、「秦州にて勅目を見るに、薛三璩は司議郎を授けられ、畢四曜は監察に除せらる。遠く遷官を喜び、兼ねて素居を述ぶ。凡そ三十韻」詩(詳註卷八)に「隴俗、鸚鵡を軽んず、原情、鶴鶴に類す」というのも、「鸚鵡の賦」が禰衡の作であることを踏まえて、自らを比している。

(注3) 『旧唐書』杜甫伝。訳注稿(一)、「杜文貞公伝」参照。なお、杜甫と嚴武との關係をめぐる説話について考察したものに、松原朗「杜甫嚴武反目説話」の構造(『中国文学研究』第三十一期、二〇〇五年)及び「杜甫嚴武反目説話の消長」(『松浦友久博士追悼記念中国古典文学論集』収録、研文出版、二〇〇六年)がある。

(注4) 『漢書』佞幸伝に「孝恵の時、郎・侍中は皆駿驥を冠し、貝帶し、脂粉を付し」云々とあり、顔師古の注に「駿驥の毛羽を以て冠を飾る」と。

宇都宮遯庵の両著にも挙げる。駿驥は、山雞に似て小さな鶏冠がある鳥。錦雞。

(注5) 『世説新語』任誕篇に、裴楷の言として「阮(籍)は方外の人、故に礼制を崇はず。我が輩は俗中の人、故に儀軌を以て自ら居る」と。

(注6) 『唐詩貫珠』に「五六は其の幽事を言ふ」と。

(注7) 『世説新語』排調篇に「郝隆、七月七日、日中に出て仰臥す。人其の故を問ふ。答へて曰く、我れ書を曬す」と。宇都宮遯庵の両著にも挙げる。

(注8) 『集千家註』(巻八)に「晋の葛洪、神仙養導の法を好み、自ら抱朴子と号す。肘后要急方四巻を著す」と。宇都宮遯庵の両著に挙げる。

(注9) もっとも、鈴木虎雄『杜少陵詩集』(巻十)は、結びの二句を「此より二句は武自らいふ」と解し、後に見える「使君灘」については「浣花溪の近傍にかかる名の灘ありしならんといふ」として、嚴武が「自分は興がおこつたならば必ず駿馬をよばしてすぐおまへのそばの使君灘までゆかうとおもつてゐる」意だと説く。この解釈は、詳註に明・王嗣爽の『杜臆』を引いて「結語を以て公の往きて見るを招くと為すは、蓋し使君の二字に泥む耳。此の詩、題を草堂に寄する為に作る、自ら応に草堂に関合すべし。堂は江干に在り、故に使君灘を借用す」というのに拠る。

(注10) 『唐詩貫珠』に「按ずるに杜に『酔うて馬より墜つるを為す、諸公酒を携へて相看る』有り、長歌して云ふ、(馬に騎りて忽ち憶ふ少年の時、蹄を散じて迷落す瞿唐の石。白帝城門水雲の外、身を低くすれば直下八千尺)と。又た(実に少く銀鞍險に傍りて行くを)等の作有り、則ち此の老が馬に騎るを愛する、亦た共に知る所にして詩も亦た嘲意なり」と。
「酔うて」云々の詩は、詳註巻十八。「実に少く」云々の句は、「崔評事弟相迎ふるを許す、到らず。応に老夫泥雨を見て出づるを恐れ、必ず佳期を愆るを慮るなるべし。筆を走らせて戯れに題す」詩(詳註巻十八)の結句。

(注11) 『集千家註』に「水経に魚復県に羊腸虎背灘有り、楊亮、益州と為るとき、此に至つて舟覆る。今に至つて名づけて使君灘と為す」と。宇都宮遯庵の両著にもこれを引く。水経は、『水経注』のこと。その巻三十三、江水の条に見えるのを節録する。

(注12) 『唐詩貫珠』に「通篇、嚴詩に杜の疎懶を謂ふに酬答す。而して解嘲の

意有り、或いは承認し、或いは自ら解き、或いは暗に其の意に答ふ。須らく原詩を読み、乃ち作者の情を知るべし」と。

嚴武の「杜二が錦江の野亭に寄題す」詩にいう、「漫に江頭に向て釣竿を把る、沙草に懶眠して風濤を愛す。倚ること莫かれ善く鸚鵡の賦を題するを、何ぞ須ひん駿驥冠を戴せざるを。腹中の書籍幽時に曬し、肘後の医方静処に看ん。興発して会たま能く駿馬に騎らば、終に須らく直ちに使君灘に到るべし」と。一二句は、そのぶらぶらしてのんびり過ごす様子を言う。三四句は、直截にこれを諷する。〈鸚鵡の賦〉は、禰衡の故事を借り、その狂傲ぶりを刺している。

『唐書』本伝に「嚴武は杜甫と代々のよしみがあり、待遇よりはことのほか手厚かった。杜甫は勝手気ままで狭量であった。かつて酔っぱらつて嚴武の寝台上がり込み、嚴武を睨みすえて、嚴挺之どのにまさかかような息子がいようととは、といった。嚴武は気短かで乱暴者であったが、逆らわなかつた」と。けだし、この類の話を指すのだ。〈駿驥冠〉は、駿驥の毛羽で冠を飾つたもの。漢代、侍中の冠。公はかつて近侍の臣であつたので、これを用いた。公は態度がでかく、嚴武がその宅を訪れた際、時には冠をかぶらぬまま会うことがあつた。これも本伝に見える。それで詩に言及している。两句は、その文章が(人を驚かす)すぐれたものだとしても、才を恃んで狂傲であるのはよくないし、たとえ世俗の外に遊ぼうとも、どうして冠や頭巾をかぶらずに人に会えようか、という意。これも親友間で冗談半分にあざけてからかつていたのである。五六句は、その(幽事)を言い、かねて博学を称賛している。(腹中書を曬す)のは、郝隆の故事を用いる。(肘後方)は、葛洪が著わした医学書。結局は、気が向いて出かけることがあれば、どうかまた訪ねて来てくれと言ふ。公が馬に騎るのが大好きであつたことは、しばしば公の詩に見える。その(能く駿馬に騎る)のを称するのは、老いてなお善く馭するのを讃えていると同時に、嘲意を寓しているのである。

《使君灘》は、蜀の魚腹県にある。楊亮が益州の刺史となったとき、ここを通過して舟が転覆したことから、俗に称して《使君灘》という。借りて節度使の《城府》をいう。けだし江辺に近いためであろう。公の詩は一首全体が嚴武の詩に酬答し、嘲りを解いたり、そのまま認めたり、暗にその意に答えたりしている。まずもとの詩を味わってみてこそ、唱和した詩の趣旨が分るのであつて、それゆゑ具体的に挙げて詳しく説いた。

拾遺會_テ奏_ス數行_ノ書 懶性從來水竹ノ居

※懶性：ブシヤウモノ

奏_スレ_ハ書_ヲ指_シ上_ニ疏_ヲ救_フ房瑄_ノ。水竹ノ居ハ即浣花ノ草堂也。言余

雖_レ曾_テ居_ニ親_近言路_一然_{トモ}實_ニ性_ノ懶_考曾_テ繫_ス水竹_ノ境_一分_之所_レ稱_フ也。拾遺_ハ實_ニ爲_ニ清華_ノ之_ノ官_一。此詩開_レ口_ヲ使_自稱_ス拾遺_一、兀

傲_之氣_如見_且見_共爲_ニ舊_閣老_一曾_テ奏_ス數行_ノ書_ヲ亦_見不_レ畏_レ彊_禦然_{トモ}次_乃接_シ得_圓轉_遜抑_躲過_不露_精神_一與_王右丞_温泉_寓日_起聯_同一_手段_一。

（注13）顧宸『註解』に「按ずるに公、左拾遺と爲り、上疏して房瑄を救ふ。此れ云ふ所の數行の書を奏するなり」と。宇都宮逸庵の両著にも挙げ

る。ちなみに、訳注稿(一)、「杜文貞公伝」に「房瑄、陳濤斜の敗を以て相を罷めらる。公、瑄と旧交、疏を上つて瑄才有り宜しく廢免すべからざることを論ず」と。

（注14）邵宝『集註』（卷二十三、簡寄類）及び薛益『分類』（卷二、酬寄）に「水竹の居は、即ち草堂なり」と。『分類』は宇都宮逸庵の増広本に『集註』は詳説に挙げる。

（注15）『唐詩貫珠』に「起、言ふところは余曾て親切の言路に在りと雖も、然れども実に性懶にして水竹に居るを好む」と。言路は、諫官の地位。ここでは、左拾遺を指す。

（注16）『詩経』衡風・考槃に「槃を考して澗に在り、碩人之れ寛し」とあり、朱子の集伝に「考は、成なり。槃は、槃桓の意。其の隠処の室を成すを言ふなり」と。

（注17）閻老については、訳注稿(五)、022「至日興を遺る。北省の旧閻老・兩院

の故人に奉寄す」詩二首其一の詳解に「蓋し中書・門下の官人互ひに閻老を以て相呼ぶなり」、「旧閻老は嚴武・賈至の輩を指す。時に武は給事中爲り、門下省に屬す」というのを参照。

（注18）『詩経』大雅・蒸民に「矜寡を侮らず、彊禦を畏れず」と。彊禦は、權勢を笠にきる者。

（注19）王維の七律「太常草主簿五郎の温泉寓目に和す」詩（『唐詩選』卷五）。訳注稿(四)、015「曲江雨に對す」詩の（注5）に挙げるのを参照。

《書》を《奏》すは、疏を上つて房瑄を救おうとしたことを指す。

《水竹の居》は、すなわち浣花の草堂である。この意味は、私はかつて天子に親近する諫官の地位にいたもの、実に《性》《懶》

で、《水竹》の境に隱遁しており、分際になつたことであると言うのである。《拾遺》は、実に清華の官である。この詩は開口一番、

ぐに自ら《拾遺》と称しており、傲岸の氣象がまるで目に見えるよ

うで、それに嚴武とともに元は閻老の身分であつたことを表わして

いる。《曾て數行の書を奏》したのも、やはり權勢を畏れないのを表

わしている。されど次句になると続き具合が円転とし、謙遜抑制し

やり過ごして、心意気を露わにしない。王右丞の「温泉寓目」詩の

起聯と同一手段である。

奉引濫_リ騎_ニ沙苑_ノ馬 幽栖眞_ニ釣_ル錦江_ノ魚

※奉引：オサキノリ 濫：カタジケナクモ

奉引_ハ導_ヲ駕_ス也。後漢劉聖公傳_ニ李松奉引馬驚_ヲ。濫_ハ謙辭_猶忝_也。沙苑_ハ馬_ノ謂_ニ御廐_之駿_一。沙苑_ハ在同州馮翊縣_ノ南_也。東西

八十里南北三十里。唐置_ニ沙苑監_ヲ牧_馬。明皇命_ニ王毛仲_ニ監_之。牧_至四十餘萬_匹之盛_也。公有_ニ沙苑行_一、具_ニ記_ス其事_一。沙苑_ノ所_レ進_必是_駿馬_{、答}嚴詩_ノ第七句_也。眞_ニ釣_ハ答_ニ嚴詩_一、

一二_ニ、故_ニ曰_レ眞_ニ、猶_云レ如_レ所_レ喻_也。上_ノ句承_{拾遺}、下_ノ句承_{幽棲}。昔騎_ニ沙苑_ノ駿_馬爲_ニ御前_ノ先驅_一、今_ハ則垂_ニ釣_ニ錦

江_ニ、眞_ニ作_ニ一漁夫_ト矣。此雖_ニ言孫_ト、然_{トモ}隱然_ノ崛強_{、有}一_種不_肯倒_一架子_ノ意_上。

不_肯倒_一架子_ノ意_上。

不_肯倒_一架子_ノ意_上。

不_肯倒_一架子_ノ意_上。

不_肯倒_一架子_ノ意_上。

不_肯倒_一架子_ノ意_上。

不_肯倒_一架子_ノ意_上。

不_肯倒_一架子_ノ意_上。

不_肯倒_一架子_ノ意_上。

〔注20〕 邵宝『集註』及び薛益『分類』に「奉引は、駕を導くなり」と。『分類』は宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。なお、邵傳『集解』も「奉引」の下に「導駕」と注する。

〔注21〕 『後漢書』劉聖公伝。集千家註に引く。宇都宮遯庵の増広本に挙げる。

〔注22〕 積大典『詩語解』巻下に「字彙、叨ハ忝也。濫ハ叨濫也。叨窃也。窃ハ私也。（中略）三者多為謙辭」と。

〔注23〕 『元和郡県図志』卷二、関内道、同州馮翊県の条に「沙苑、一名沙阜。県南十二里に在り。東西八十里、南北三十里」と。

〔注24〕 『唐詩貫珠』に「沙苑は、同州に在り。玄宗、王毛仲に命じて馬を牧せしむ。四十餘万匹の盛に至る」と。

王毛仲については、『旧唐書』卷一〇六、『新唐書』卷一二二に伝がある。玄宗の先天二年（七一二）七月、輔国大將軍・左武衛大將軍・檢校内外閑廐兼知監牧使を授けられ（旧）玄宗本紀、『旧』伝、「初め監馬二十四万、後に乃ち四十三万に至る」（新）伝という。

〔注25〕 詳註卷三。天宝十三載（七五四）の作とする。

〔注26〕 『唐詩貫珠』に「詩中自ら拾遺と称し、又た奉引して御馬に騎すは、皆一種肯へて架子を倒さざるの意有り」と。架子は、明清の口語で、かゝい態度、強気の姿勢。詳解の訓点、「有一種不肯倒架子意」とする方がよいであろう。

〔奉引〕は、車駕を先導することである。『後漢書』劉聖公伝に「李松奉引して馬驚く」と。〔濫〕は、謙辞。忝かたじけなうすとほぼ同じ。〔沙苑の馬〕は、御廐の駿馬のこと。〔沙苑〕は、同州馮翊県の南にあり、東西八十里、南北三十里。唐代、沙苑監を置き馬を放牧させた。明皇（玄宗）は王毛仲に命じて牧場を管理させ、四十餘万匹という数にまで繁殖した。公に「沙苑行」の作があり、つぶさにその事を記している。〔沙苑〕から進められるのは必ず駿馬で、嚴武詩の第七句に答えている。〔真に釣る〕は、嚴武詩の一二句に答えており、それゆえ〔真に〕という。喩えられたとおりだということと同じ。上句は〔拾遺〕を承け、下句は〔幽棲〕を承ける。昔は〔沙苑の馬〕に〔騎〕つて御前の先駆となっていたが、今では釣糸を〔錦江〕に垂れ、〔真に〕

一介の漁夫となつてしまつてゐる。これは、言葉つきは謙遜してゐるとはいえ、しかしどことなく鼻づ柱が強く、あえてでかい態度をくずさないという意がある。

謝安不レ倦登臨賞 阮籍焉知レ禮法疎ナルヲ

晉謝安喜ニ山水ヲ、攜テ妓ヲ遊賞ス。以比ニ嚴公風流、好ニ遊覽之賞ヲ。舊本賞作費ニ、太俗。且不レ倦レ費ニ、殊ニ不レ成レ語ヲ、不レ

若賞ヲ字雅ニシテ且安ナルニ。故從ニ輯註本ニ正ス之ヲ。嵇康絶交書ニ、阮

嗣宗至性過レ人ニ、與レ物無レ傷コト、唯飲レ酒ヲ過差耳。至レ爲ニ禮法之

士ノ所レ繩サ、疾レト之ヲ如レ讎ニ。幸ニ頼ニ大將軍保持ス之ヲ耳。上句

承幽棲錦江ヲ、言嚴公喜レ遊、風流忘レ勢、嘗テ既ニ枉ニ駕ヲ野

亭ニ、冀クハ復來テ遊賞センコトヲ。下句承ニ拾遺奉引ヲ、謝ス狂傲失禮之

過ヲ。言非ニ故サラ作ニ疎放ヲ、況ヤ敢テ倚テ能レスニ文ヲ而驕ニヤ。亦唯將

軍禮數寬、故ニ沐レ恩ニ乘レ興ニ而不自知ニ耳。遜言テ冀ニ其恕

宥ヲ。然トモ焉知ン二字大ニ有ニ骨氣、未ニ肯テ自屈セ、何ソ其強項ナル

耶。胡燮亭云、此總テ酬ニ嚴詩三四、亦從リテ原題野亭而

來。然シテ詩意中有ニ微辭。蓋言遊覽ハ風雅、何能拘ニ於禮法ニ、

不レ然シテ花間ニ喝道、背テ山ニ起レ樓ヲ、一種ノ俗人ニ耳。此意人

未ニ看出、燮亭可レ謂眼光透ニ紙背ニ矣。

〔注27〕 謝安、字は安石（三二〇―三八五）。肥水の戦いで前秦・苻堅の軍を破り、その南進を阻止するのに大功があった。重任される以前、会稽（浙江省紹興市）に寓居し、「情を丘壑に放つと雖も、然れども游賞する毎

に、必ず妓女を以て徒へ」という。『晋書』卷七十九に伝がある。

〔注28〕 邵傳『集解』を指す。なお、『集千家註』も同様。『唐詩貫珠』に「千家本は、〔賞〕を〔費〕に作る。本づく所有りと雖も、然れども〔費〕字、俗に近し。〔賞〕字の妥なるに若かず」と。ちなみに、鈴木虎雄「杜少陵詩集」は、詳註に従つてその本文を「賞」に作るが、「費」の字は不倦に対して接続よろしからぬ様なり、一本に賞に作れるあり、余は賞に従ふ、

賞は山水を賞愛することなり」と注する。

〔注29〕 輯註（卷九）は〔費〕に作り、「一に賞に作る」と。宇都宮遯庵の増広

本にも挙げる。

- (注30) 三国魏・嵇康(字は叔夜。二二四―二六三)の「山巨源に与へて交はり絶つ書」(『文選』卷四十三)。阮嗣宗は、阮籍(字は嗣宗。二一〇―二六三)のこと。大將軍は、司馬昭(二一一―二六五)を指す。ちなみに、杜甫が自らを阮籍に比した例として、他に次のようなものがある。

・君 途窮の哭を見る、宜しく阮步兵を憂ふべし

(「敬んで鄭諫議に贈る十韻」詩、詳註卷二)

・今に至って阮籍の等、熟酔身の謀を為す

(「晦日、崔駰・李封を尋ぬ」詩、詳註卷四)

・阮籍行くゆく興多からん、龐公隠れて還らず

(「秦州雜詩二十首」其十五、詳註卷七)

・茫然たり阮籍が途、更に楊朱の泣を灑ぐ

(「早に発す、射洪原南途中の作」詩、詳註卷十一)

・蒼茫歩兵哭す、展転仲宣哀しむ

(「秋日荆南の述懷三十韻」詩、詳註卷二十一)

- (注31) 次の044「嚴公仲夏、駕を枉げ兼ねて酒饌を携ふ。寒字を得」詩の第四句に「自ら識る將軍札數寛し」と。

- (注32) 『書言故事』卷五、悪性類に「強項」を載せ、「強梗にして服せず」と注して、後漢の董宣の故事を挙げる。

- (注33) 『唐詩貫珠』に見える。胡燮亭については、訳注稿(二)、002「鄭駙馬潜曜洞中に宴す」詩の(注16)参照。

- (注34) 『義山雜纂』「殺風景」の条に「花間喝道」、「背山起樓」と見え、宝曆十二年(一七六二)刊の『義山訳解』には「喝道」に「サキバラヒ」と左訓を施す。

- (注35) 読書において、その深意を読み取る洞察力が卓絶していることをいおうが、出処不明。

なお餘談ながら、福本雅一『読書の詩』上(アートライフ社、二〇〇五年)の二三五―二三六頁に、「行間どころか、書かれた文字の内部まで洞察することを、よく「眼光 紙背に徹す」と言うが、私は初め、これは中国に古くからある言葉であると信じていた。豈に計らんや、これがわが近世の塩谷宕陰の造語であることを、最近知って一驚した」として、

その「安井仲平の東遊を送るの序」に「読書紙背を透し」云々とするのを挙げるが、宕陰(一八〇九―一八六七)の造語ではなからう。

晋の〈謝安〉は、山水を喜び、妓女を携えて遊賞した。それで嚴公が風流で遊覧の〈賞〉を好むのに比した。日本は〈賞〉を〈費〉に作るが、はなはだ俗だ。それに「費に倦まず」だと、とりわけ語を成さず、〈賞〉字の雅正にして妥当であるのは及ばない。それゆえ輯註本に従ってこれを訂正する。嵇康の「絶交書」に「阮嗣宗(籍)は常人に卓絶した品性の持ち主で、他人と傷つけることなく、ただ酒を飲むのが度を過ぐすだけです。礼法を後生大事とする士から糾弾され、まるで讐敵のように憎まれております。幸い大將軍のおかげでどうにか身を保っているのです」と。上の句は、〈幽棲〉及び〈錦江〉を承け、嚴公が出遊を喜び風流で權勢を忘れ、かつてわざわざ〈野亭〉に〈駕を枉げ〉て訪ねてくださった、どうか再びやって来て遊賞していただきたいと言う。下の句は、〈拾遺〉〈奉引〉を承け、傲慢で礼を失した過ちを謝しており、ことさらに疎放のふるまいをしたのではなく、ましてや文章を能くするからといって驕慢になつたりしようか、やはりただ「將軍は札數寛し」であることから、それゆえ恩恵に浴し調子に乗って自ら気がつかなくなったのだから。謙遜した言葉でその寛恕を求めてはいるが、さりながら「焉んぞ知らん」の二字には大いに氣骨があり、いまだあえて自ら屈せず、何とといった強情なことか。胡燮亭が云う、「これはすべて嚴武詩の三四句に応酬したもので、やはり原題の〈野亭〉から来ている。されど詩意のなかに微辞がある。けだし、ここでの意味は、遊覧は風雅であるのに、どうして礼法に拘束されようか。さもなければ『花間に喝道し、山を背にして樓を建てる』ような一種の俗人なるのみだ、というのである」と。この意は人がまだ読み取らなかつたもので、燮亭は「眼光紙背に徹す」といえよう。

枉テ沐セハ旌麾ノ出ルニ城府ヲ 草茅無レ徑欲レ教レト鋤

※枉：ナニトゾ

枉ハ屈セ也。沐ハ猶蒙ノ也。鋤ハ謂揮テ鋤ラ割レ草ヲ。楚辭卜居（注37）寧誅

鋤シテ草茅ヲ、以力耕セ乎。上句承登臨ノ賞ヲ、結句承禮法疎ヲ、

併ニテ懶性幽棲ヲ、一齊收拾（注38）。言幽棲荒蕪没レ徑ヲ、懶性未レ嘗テ掃

除セ。若幸ニ不レ倦遊覽ヲ、枉テ蒙ニ旌麾辱臨（注39）、則須誅ニ鋤シテ草

茅ヲ、開徑ヲ以奉待ト也。此恐禮法之疎（注40）、示恭敬之意ト也。燮

亭（注41）云、因ニテ來詩欲スニ其來見（注42）、此則反テ請ニ其見（注43）臨（注44）、照シテ

事ヲ有ニ機鋒、語ハ則遜抑ス。想見（注45）此老與ニ節使（注46）交ル、未レ嘗テ自

下（注47）。英雄骨氣可レ知。余因テ憶（注48）劉禹錫亦號（注49）詩豪ト、至レ和（注50）答（注51）

牛僧孺（注52）所（注53）詰（注54）、乃卑（注55）辭（注56）下（注57）氣（注58）、搖（注59）尾（注60）乞（注61）憐（注62）、豈非失（注63）其

守（注64）乎。如（注65）公（注66）此詩（注67）、則能遜抑（注68）、而無（注69）所（注70）屈（注71）、從容中有（注72）毅

然（注73）、不（注74）可（注75）犯者、其所養可（注76）知也。

（注36） 前出041「嚴中丞駕を枉げて過らる」詩の（注2）参照。

（注37） 『文選』卷三十三にも取む。『集千家註』に挙げ、宇都宮遯庵の増広本に引く。

（注38） 顧宸『註解』に「正に礼法の疎を見はす。懶性幽棲を併せて、一齊に收拾す」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

（注39） 『唐詩貫珠』に「結は蓋し嚴詩に其の馬に馳し来りて使君見えんことを欲するに因つて、此れ則ち反つて其の臨照を請ふ。事に機鋒有り、未だ嘗て自ら下らず。才人の骨氣知る可し」と。臨照は、古く「左氏伝」

桓公二年に見え、上から下を照らす意で君主の恩沢をいうが、ここでは来臨の意。詳解の訓点は、恐らく誤まり。

（注40） 劉禹錫（字は夢得。七七二〜八四二）については、『旧唐書』巻一六

〇、『新唐書』巻一六八に伝が見え、小川環樹編『唐代の詩人―その傳記』に『旧』伝の訳注を取む（中津濱渉執筆）。また松浦友久編『校注唐詩解釈辞典』の詩人小伝（埋田重夫執筆）参照。その年譜に下孝宣『劉

禹錫年譜』（中華書局、一九六三年）があり、その箋注に瞿蛻園『劉禹錫集箋證』（上海古籍出版社、一九八九年）を始め、陶敏・陶紅雨校注『劉

禹錫全集編年校注』（岳麓書社、二〇〇三年）、高志忠校注『劉禹錫詩編

年校注』（黒龍江人民出版社、二〇〇三年）等がある。

（注41） 白居易の大和三年（八二九）作「劉白唱和集解」（『白氏文集』巻六十）に「彭城の劉夢得は、詩の豪なる者なり」と。「新』伝に「禹錫 詩を善くし、晚節尤も精なり。（中略）居易は詩を以て自ら名づくる者にして、嘗て推して詩豪と為す」と。なお、「劉白唱和集解」は、柴格朗『劉

白唱和集（全）』（勉誠出版、二〇〇四年）に訳注がある。

（注42） 牛僧孺（字は思黯。七八〇〜八四二）については、『旧唐書』巻一七二、『新唐書』巻一七四に伝が見えるほか、丁鼎『牛僧孺年譜』（遼海出版社、一九九七年）がある。

（注43） 『唐詩貫珠』（巻二十一、逸事酬贈）に、「牛僧孺の「劉禹錫に贈る」詩と劉禹錫の「和韻」詩とを載せ、「劉賓客素より詩豪と称す。此に至つて辭を卑しくし氣を下す、爾らざるを得ず」という。下気は、態度を恭しくする意。次に「唐詩貫珠」から、二人の詩を挙げておく。

贈劉禹錫 牛僧孺

粉署爲郎四十春 粉署 郎爲ること四十春

今來名輩更無人 今來 名輩更に人無し

休論世上沈心事 論ずるを休めよ世上沈心事

且問鐘前見在身 且つ問はん鐘前見在身

珠玉會應成咳唾 珠玉 会す處に咳唾を成すべし

山川猶覺露精神 山川 猶ほ覺ゆ精神を露はすを

莫嫌特酒輕言語 嫌ふ莫かれ酒に恃んで言語を軽んずるを

曾把文章調後塵 曾て文章を把つて後塵を調す

和韻 劉禹錫

昔年曾忝漢朝臣 昔年曾て 忝、うす漢朝の臣

晚歲空餘老病身 晚歲空しく餘す老病の身

初見相如成賦日 初めて見ゆるは相如賦を成す日

後爲丞相掃門人 後に爲る丞相門を掃く人

追思往時咨嗟久 往時を追思して咨嗟すること久し

幸喜清光笑語頻 幸ひに清光笑語頻りなるを喜ぶ

猶有當時舊冠劍 猶ほ當時の旧冠劍有り

待公三日拂埃塵 公が三日を待ちて埃塵を払はん

なお、『唐詩紀事』巻三十九、牛僧孺の条に見える次のような話を載せ

る。ちなみに、これは晩唐・范攄の『雲溪友議』巻中、中山誨の条に基づくものである。

公、拳に赴く秋、嘗て鬢を劉補闕禹錫に投ずるに、客に對して巻を展べ、筆を飛ばし其の文を塗抹す。二十餘歳を歴て、劉は汝州に転じ、公は海「淮」南を鎮す。道を枉げて旌を駐め、信宿して酒酣にして詩を賦す。劉方に往年公の文巻を改めしことを悟る。僧孺の詩に曰く、……(略)。禹錫和して云ふ、……(略)。牛公、和詩を吟じ、前意稍や解く。曰く、三日の事、何ぞ敢へて当たらんと。是に于いて宴を移して竟夕、方に前駆を整ふるなり。劉乃ち其の子咸允・承雅を戒めて曰く、吾れ人の志を成すに、豈に料らんや非を為すを。汝が輩、進修するとも、中を守るを上と為せ。

牛僧孺の詩は「席上、劉夢得に贈る」と題して、『全唐詩』巻四六六に収め、劉禹錫の作は「淮南の牛相公の旧を述べて貽らるるに酬つ」詩(『劉賓客集』外集卷六)、『全唐詩』卷三六一。文字に異同があり、牛僧孺詩については、唐詩紀事・全唐詩に〈問〉字を〈闕〉に作る。また劉禹錫詩、その集や全唐詩は〈昔年〉を〈少年〉に、〈漢朝〉を〈漢廷〉に、〈後〉を〈尋〉に、〈幸喜〉を〈喜奉〉に、〈當時〉を〈登朝〉にそれぞれ作る。さらに全唐詩は〈三日〉を〈三人〉に作る。二人の詩については、柴格朗、前掲書六六〇〜六六二頁にも載せる。

(注43) 韓愈の「科目に應ずる時、人に与ふる書」(『韓昌黎集』卷十八)に「首を俛し耳を帖れ尾を揺るがして憐れみを乞ふが若き者は、我が志に非ず」と。ちなみに、『書言故事』巻五、悪性類に「乞憐」を載せ、韓愈の文を引く。

〈枉〉は、屈である。〈沐〉は、蒙とほぼ同じ。〈鋤〉は、鋤をふるって草を取り除くこと。『楚辞』卜居に「寧ろ草茅を誅鋤して、以て力耕せんか」と。上句は〈登臨の賞〉を承け、結句は〈礼法の疎〉を承け、〈懶性〉(〈幽棲〉)とを合わせて、一斉にとり収めている。〈幽棲〉して雑草が〈徑〉を埋め、〈懶性〉でこれまで取り除いたことがない。もし幸いに遊覧に倦まず、〈枉〉げて〈旌塵〉の御來臨をいただければ、ぜひとも〈草茅〉を誅鋤し〈徑〉を開いて奉待せねばならないと言っているのである。これは〈礼法の疎〉なるを恐れ、恭敬の意を示し

ているのである。胡燮亭が云う、「もらつた詩に訪ねて来るようにとあることから、ここでは逆にその來臨を請うており、当意即妙の機鋒がある。言葉つきは謙遜抑制しているが、この老人が節度使と交際するのに、これまで自らへり下つたことのないのが想見できよう。英雄の土性骨が分かる」と。私がそれにつけて想起するのは、劉禹錫もやはり詩豪と号されたが、牛僧孺の詰問に答えた詩では、なんと辞を卑しくし態度を恭しくして、しつぽを振って憐れみを乞うていることだ。その守ることを失したものでないか。公のかかる詩のごときは、よく謙遜抑制しているが、屈するところがない。振舞いのなかにも毅然として犯すべからざるものがあり、その培ってきたものがわかるのである。

044 嚴公仲夏枉駕草堂兼攜酒饌得寒字

應是感前詩之義、折節惠然肯來上。嚴公誠可人哉。

搆一作遣。

(注1) 『詩經』邶風・終風に「終風且霾、惠然として肯へて來たる」と。毛伝に「時に順心有るを言ふなり」と。

(注2) 善き人。例えば、『礼記』雜記下に「其の与に游辟する所や、可人なり」と。

(注3) 薛益「分類」(巻二、尋訪)は、〈携〉字を〈遣〉に作る。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

これは前詩の意に感じて、我意をまげ素直にやつて来たものである。嚴公は、まことに善き御仁だ。〈携〉、一に〈遣〉に作る。

竹裏行厨洗玉盤 花邊立馬簇金鞍

※洗：キヨメル 盤：ゼン

竹裏ハ蓋後園也。公草堂詩ニ有ニ步履萬竹疎之句、知其有ニ大竹林矣。行厨ハ嚴公所レ攜酒饌。玉盤ハ饌器。蓋有司移厨帳而來、就竹陰張設之也。只舉玉盤以槩其餘。諸皆美器、

想像溢る目。酒肴之美、亦在其中矣。此舉ヲ畧ヲ以例詳之法。簇ハ金鞞、言門前騎從ノ羣馬繫テ在ニ花間也。此亦影畧、止舉テ一件ヲ、以該諸餘ヲ、旗蓋之盛在ニ其中ニ矣。花竹環レ居ヲ、景境清幽、蓋足ニ以娛ニ賓ヲ矣。玉盤映レ竹ニ、金鞞耀レ花ニ、實ニ草堂生レ光也。燮亭云、二句寫得宛然。節帥移ニ饌ヲ於草堂ニ飲宴ス、富貴清雅、兼テ而有レ之。不レシテ言レ設レ席ヲ、乃以レ洗レ盤ヲ輕ク點ス、不レ犯ニ正位ヲ、妙。按起不レ用レ引、直ニ敘ニ盛歡ヲ、與ニ城西陂泛レ舟ヲ同一起法、皆以ニ興殊ニ劇ヲ也。

(注4) 広徳二年（七六四）再び洗花草堂にもどつての作「草堂」詩（詳註卷十三）に、「門に入れば四松在り、步履万竹疎なり」と。

(注5) 邵宝『集註』（卷二十三、尋訪類）及び薛益『分類』に「行厨は嚴公自ら携ふる所の酒饌なり」と。『分類』は宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注6) 薛益『分類』に見える。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。饌器は、食物を盛る器。

(注7) 『詩人玉屑』卷三、句法に「影略句法」を載せ、「鄭谷、落葉を詠ず、未だ嘗て彫零飄墜の意に及ばざるに、人一たび之を見るや、自然に落葉為るを知る」という。

ちなみに、三浦梅園『詩敵』卷四、篇法に「賦トハ其儘ニ詠シ出セル也。直叙ト言ヘルモ別ノ義ニアラズ。唯其儘ニイヘル也。ソコヲソレトイハズシテ、其意ニ現ル、ヲ象外ト云。影略モ亦相似タリ。影写トモ風影トモ云。詩作ル人、此境ヲ得ザレバ、妙境ニ悟入スルコト能ハズ」と。

(注8) 『唐詩賈珠』（卷十六、雅事酬贈一）に「一二写し得て宛然。一節帥饌を草堂に移して飲晏す、富貴清雅、兼ねて之有り。席を設くと言はずして、乃ち盤を洗ふを以て軽く点す、正位を犯さず、妙」と。

(注9) 訳注稿(一)、003「城西の陂に舟を泛ぶ」詩の詳解に「起手、序引を用ひず、直ちに欲酣なるの状を叙す」と。

〈竹裏〉は、けだし後園であらう。公の「草堂」詩に「步履万竹疎なり」の句があり、大きな竹林であったことが分かる。〈行厨〉は、嚴公が携えてきた酒饌。〈玉盤〉は、饌器。けだし賄い方の下役人が

厨帳を移して来て、〈竹〉陰に張り設けるのである。ただ〈玉盤〉を挙げて、その他のものをひつくるめてゐる。もろもろの品々はいずれも美器で、想像すると目に溢れんばかりだ。酒肴の美味なることも、やはりそのなかに含まれている。これは大略を挙げて詳細を類比させる方法。〈金鞞簇る〉は、門前まで騎從してきた群馬を〈花〉間に繋いでいることを言うのである。これもやはり影略法で、ただ一つの事柄を挙げて、その他のものを合わせ含めている。旗さしものや車蓋の盛大さは、そのなかに含まれている。〈花〉や〈竹〉が住居をぐるりととりまき、周囲の景色は清閑幽静で、けだし賓客を娯しませるのに充分であつたらう。〈玉盤〉が〈竹〉に映じ、〈金鞞〉が〈花〉にきらめき、実に草堂に光彩を生ずるのである。胡燮亭が云う、「二句はありありと描写している。節度使が酒饌を草堂に移して宴飲するのは、富貴と清雅との意がふたつともある。席を設けることを言わず、かえつて〈盤〉を〈洗〉うことで軽く点綴しているのは、正位を犯さず、絶妙である」と。按ずるに始めに導入部を用いず、いきなり盛歡のさまを叙しているのは、「城西の陂に舟を泛ぶ」と同一の起法で、いずれも興趣がことの外はなはだしいためである。

非レ關ニ使者徵求ノ急ナレ

自識ル將軍禮數寛シ

※急：セハシキ 礼數：オリメキリメ 寛：ナリヤイ

使者徵求ハ用ニ莊子顔闔ノ事ヲ。天子召命ヲ曰徵。禮數ハ禮法之品數。尊卑各（有）ニ等差也。廉頗傳ニ不レ知將軍寛之至レ此也。

寛ハ言レ不レ責也。上句承ニ第二、下句ハ承ニ起句。僻地柴門之陋ニシテ而花邊簇ニ金鞞一。似下是勅使來臨シテ徵ニ求處士ヲ之急ナルミ、不ハ然世間決シテ無之。外人ハ望ニ見テ之ヲ、必疑以爲レ然ト。故ニ曰レ非レ關ニ以解レ之ヲ。將軍之枉レ駕ヲ、攜ニ行厨ヲ以來ル、能憐ニ舊好ヲ、不ニ自高亢セ、從容款曲、如ニ平生ノ歡ノ、故ニ曰レ禮數寛ト。自識ニ對シテ外人疑望者ニ而言。將軍盛意、公獨深ク自識也。此自ニ前首ノ阮籍

焉^レ知禮法疎^レ來^ル。蓋嚴公因^ニ酬答^ノ詩^ニ而來^ル、故^ニ公特^ニ有^ニ此句^一。

(注10) 輯註(卷九)に「使者徵求は、顏闔が事を用ふ。鄭諫議に贈る詩に、

使者顏闔を求む」と。宇都宮逕庵の増広本にも挙げる。「莊子」讓王篇に「魯君、顏闔の道を得たるの人なりと聞くや、人をして幣を以て先んぜしむ。顏闔、陋闔を守り直布の衣にして、自ら牛に飯す。魯君の使者至る。顏闔自ら之に對す。使者曰く、此れ顏闔の家かと。顏闔對へて曰く、此れ闔が家なりと。使者幣を致す。顏闔曰く、聴く者^{譯りて}使者に罪を遣らんことを恐る。之を審らかにするに若かずと。使者還反して之を審らかにし、復た來りて之を求むれば則ち得ざるのみ。故に顏闔の若き者は、真に富貴を惡むなり」と見える。なお、輯註に指摘するように、杜甫の「敬んで鄭諫議に贈る十韻」詩(詳註巻二)にも「使者顏闔を求むるも、諸公彌衡を厭ふ」と。

(注11) 何か基づくところがあるのか、不明。

(注12) 『史記』廉頗藺相如列伝。「將軍(藺相如を指す)の寛容がここまで大きなものとは知らなかった」の意。輯註に挙げ、宇都宮逕庵の増広本にも引く。

(注13) 邵傳『集解』に「嚴公)駕を草堂に枉ぐ、豈に朝使鶴書徵求の急にして然らんや。実に自ら高亢せざるに由つて、從容として來たつて幽側を訪ふなり」と。高亢は、お高くとまる。

(注14) 日頃の馴染み。「漢書」張耳伝に「苦を勞ふこと平生の欲の如し」と。ちなみに、「書言故事」巻三、交情類に「平生懽」を載せ、「素と相善きを平生の懽と曰ふ」として、これを挙げる。

〈使者徵求〉は、「莊子」に見える顏闔の故事を用いる。天子の召命を〈徵〉という。〈礼数〉は、礼法の品級。尊卑にそれぞれ等級があるのである。「廉頗伝」に「將軍寛の此に至るを知らず」と。〈寛〉は、当然のこととして求めないことを言うのである。上句は第二句を承け、下句は起句を承けている。片田舎で〈柴門〉のみさくるといところでありながら、〈花辺〉に〈金鞍〉が〈簇〉っている。これは勅使がやって来て処士を〈徵求〉するのに急なるに似ているが、そうでなければ世間では決してありえないことである。知らぬ人が

その様子を望見すれば、必ずやそうかと思つてしまふだろう。それゆえ〈関するに非ず〉といつて誤解をといっている。〈將軍〉が〈駕を枉げ〉て訪問してくださるのに、〈行厨〉を携えやつて来て、古なじみを憐れみ、自ら高ぶらず、すつかりくつろいで打ち解け、かつて親しい時のままのようであった。それゆえ〈礼数寛し〉という。〈自ら識る〉は、見知らぬ人の疑い望む者に対して言う。〈將軍〉の厚き好意は、公だけが深く〈自ら識〉っているのだ。これは前首の「阮籍焉んぞ知らん礼法の疎なるを」から來ている。けだし〈嚴公〉が酬答の詩によつてやつて來たので、それゆえ公に特にこの句があるのだろう。

百年地僻^ニ柴門^ニ迴^{ナリ} 五月江深^シ草閣^寒

※地僻:カタイナカ 迴:セケンラハナレ 深:ナミくトシテ 寒

…ソツトスル

百年^ハ猶^レ言^ハ一^ニ生^ト 浣花村去^ニ府城^ヲ五里[、]故^ニ曰^ニ地僻^ト。公飽^ニ繫^{シテ}于此[、]以^テ終^ニ百年^ヲ。自^ニ哀^ニ之^詞也。迴^ハ謂^ニ清迴^{絶^レ俗^ヲ也。此}

句^{反^ニ襯^ス第二^ニ}。五月江深^ハ夏水^尤盛^之時^{ナリ}。題^{爲^ニ此^{句^ノ特^ニ書^ス仲夏^ヲ}}。蓋夏江水漲、瀾漫浸^レ岸、時方^ニ五月^{溽暑^ニシ、}而草閣臨^レ水^{ニ、}不^ニ翅^{致^ニ爽氣^{ヲ、}殆}凜然^{覺^レ寒^ヲ也。此句照^ニ應^ス起句^一。閣}

上納涼之宴、竹裏行厨^ノ所^レ進^ニ玉盤^{盛^リ來^{ル、}宛然可^レ想。}

(注15) 邵宝『集註』に見える。

(注16) 訳注稿(四)、025「居をトす」詩の詳解に「浣花谿、一名百花潭、成都府西南五里に在り」と。その(注6)参照。

(注17) 前出041「嚴中丞駕を枉げて過ぎらる」詩の(注20)参照。

(注18) 李白の「客中行」(「唐詩選」巻七)に「蘭陵の美酒鬱金香、玉碗盛り來たる琥珀の光」とあるのを想起させる。

〈百年〉は、一生と言うのとほぼ同じ。浣花村は、府城から五里のところにあるので、〈地僻〉という。公はぶらさがった匏^クのようにここに留まったまま、〈百年〉を終える。自ら哀しむ詞である。〈迴〉

は、はるか遠く俗世間を離れることである。この句は第二句に対比して際立たせている。「五月江深し」は、夏の水量がもつとも多い時である。詩題にはこの句のためにわざわざ「仲夏」と書いた。けれど夏の江は水が漲り、ひろびろとして岸を浸し、時はちようど「五月」の溽暑ではあるが、「草閣」は水に臨んでおり、ただ爽氣を致すばかりでなく、ほとんどぞくぞくとして「寒」さを覚えるほどである。この句は起句と照応している。閣上での納涼の宴において、「竹裏の行厨」から進められた「玉盤」の盛られてきた様子を、さながら想像できよう。

看^レ弄^レ漁舟^ヲ移^ニ白日^ヲ 老農何^レ有^レ罄^ニ交歡^ヲ

※看弄：ケンブツシナグサム 交歡：ゴチソウ

看^ニ弄^ハ漁舟^ヲ言^フ漁人操^レ舟^ヲ撒^レ網^ヲ、各自得^レ魚^ヲ之盛^{ナル}、倚^レ閣^ニ看^ニ弄^シ以^テ娛^レ目^ヲ也。移^ハ白日^ヲ言^フ終日消^ス暑^ヲ待^テ晚^ヲ而歸^ル也。老農^ハ公自謂^フ。反^ニ對^ス將軍^ニ。謝^レ辱^ニ忘^ル形^ノ之交^ヲ也。何^レ有^レ罄^ニ交歡^ヲ言^フ田家貧^シ陋^シ無^レ所^ニ供^フ奉^ス、何^レ以^テ罄^ニ其^ノ交歡^ヲ乎。唯^ニ有^レ觀^ル魚相^見耳。因^テ獨^ニ費^ス嚴^ノ之行厨^ヲ、故^ニ媿^ニ謝^ス無^ク答^セ敬^ニ也。公與^レ嚴^共爲^ス舊^ノ閣^老、今^ハ嚴^ハ爲^ス全^ノ蜀^ノ節帥^ト、故^ニ稱^シ曰^ク將軍^ト。公^ハ則^テ治^ス下^ノ一^匹夫^耳。故^ニ自^テ謂^フ曰^ク老農^ト。千載^ノ之下^ニ、使^ニ二人^ヲ氣^ヲ塞^ス。頼^ニ嚴^公善^ク待^ル之^ヲ、公亦猶^ニ稱^ス交歡^ト。眞^ニ忘^ル形^ノ之^ノ交^ヲ、抑亦所^レ謂^フ以^テ大將軍^ヲ有^レ揖客^ニ反^テ不^レ重^ク邪。

(注19) 邵宝『集註』及び薛益『分類』に見える。「分類」は字都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注20) 地位身分や年齢などを問題にしない交友。例えば、杜甫の「醉時歌」(詳註巻三)に「形を忘れて爾汝に到る、痛飲真に吾が師なり」と。

(注21) 『唐詩貫珠』に「結びは上文の独り行厨を費やすに因って、故に交歡答敬無きを媿づるを言ふなり」と。

(注22) 前出043「嚴公、野亭に寄題するの作に奉酬す」詩の(注17)参照。
(注23) この言い方、例えば、『顔氏家訓』巻八、勉学篇に「汝をして此を以て師と為さしむれば、人をして氣塞がしむ」と。

(注24) 前漢の汲黯が今ときめく大將軍衛青に対等の礼(元礼)で接するのを人から注意されて、「大將軍を以て揖客有り、反つて重からざらんや」と答えたという(『史記』巻一二〇、『漢書』巻五〇)。揖客は、軽く会釈するだけの客。

「漁舟を看弄す」は、漁人が舟を操って網を引き上げ、それぞれ魚をたくさん獲っているのを、閣にもたれて「看弄」して目を娛しませることを言うのである。「白日を移す」は、終日暑氣払いをして晩になつてから帰ることを言うのである。「老農は、公自らの称。「將軍」と反対になつており、忘形の交わりを辱くするのを感謝しているのである。「何ぞ交歡を罄す有らんや」は、田舎家は貧乏でむさくしく提供できるようなものではなく、どうやって「交歡」を「罄」そうか、ただ魚獲りを見物していてもらうばかりだ、と言う。ひとり嚴武の「行厨」を費やしたので、それゆえ返礼するものがないのを恥じて謝するのである。公は嚴武と共に元は閣老の身でありながら、今は嚴武が蜀全土を統治する節度使となつているので、称して「將軍」というのだが、公はいえはその治下の「一匹夫にすぎず、それゆえ自らを「老農」という。千載の後ににおいても、人に胸塞がるる思いをさせる。「嚴公」が善く待遇してくれるおかげで、公もやはり「交歡」と称しており、真に忘形の交わりであるが、そもそもやはりいわゆる「大將軍を以て揖客有り、反つて重からざらんや」ということであろうか。

045 秋盡

此詩、寶應元年九月、流^ニ寓^シ梓州^ニ、思^フ浣花^ノ草堂^ヲ而作^ル。亦取^テ篇首^ニ二字^ヲ爲^ス題^ト。非^ニ必^ク詠^ス秋^ノ盡^也。按^ス年譜^ニ、是年七月、嚴武召^テ還^ル朝^ニ、公送^テ到^リ綿州^ニ、未^レ幾^ナ、西川^ノ兵馬使徐知道^ハ反^ス。因^テ入^リ梓州^ニ、冬復還^リ成都^ニ、迎^レ家^ヲ至^リ梓^ニ。十二月、往^リ射洪^ニ、南之通泉^ニ。皆梓^ノ屬^邑。

(注1) 梓州は、今の四川省三台県。

(注2) 明・単復の年譜。宇都宮遯庵の増広本に載せる。

(注3) 綿州は、今の四川省綿陽県の東。「嚴侍郎を送って綿州に到り、同に杜使君が江楼に登って宴す。心字を得たり」詩(詳註巻十一)がある。

(注4) 射洪県は、今の四川省射洪県の西北、金華鎮。通泉は、射洪県の東南、洋溪鎮。

この詩は、宝応元年(七六二)九月、梓州に流寓して、浣花の草堂を思つて作つた。やはり篇首の二字を取つて題としてゐる。必ずしも「秋尽く」るのを詠じたものではない。年譜を按ずるに、この年七月、嚴武が朝廷に召還され、公は綿州まで見送りに行つたが、ほどなく西川兵馬使の徐知道が反した。それで梓州に入り、冬に再び成都にもどつて、家族を迎えて梓州に至つた。十二月、射洪の南にある通泉に行つた。いづれも梓州の属県。

秋盡^テ東行且未^レ回^ヲ 茅齋寄^テ在^ニ少城^ノ隈^ニ

※寄:アツケテ

梓州^ハ在^レ東^ニ、故^ニ云^ニ東行^ト。且未^レ回言^下自^三避^テ亂^ヲ來^シ梓州^ニ、

徒^ニ西望^ニ成都^ヲ、且未^レ能^レ回^{コト}也。茅齋^ハ即浣花^ノ草堂^也。寄在^ノ二字見^ニ不^レ忍^レ割^ニ之^意。且妻子尙在^ニ于彼^ニ、所以傷^レ懷^也也。少

城^ハ城外^ノ小城、在^ニ成都^ノ大城^ノ之西^ニ。相傳戰國^ノ時、張儀^カ所^レ築^也。少

(注5) 輯註(巻九)に「梓州は東に在り、故に東行と云ふ」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注6) 邵宝『集註』(巻二十二、時序類)及び薛益『分類』(巻一、四時)に見える。「分類」は宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注7) 顧宸『註解』に「公、茅齋に恋恋たり。祇だ嚴武既に去り、又た徐知道が乱に逢ふを以て、之を捨てて行かざることを得ず。寄せて在りといふは、未だ割くに忍びざるの辞なり」と。宇都宮遯庵の両著にも挙げる。

(注8) 薛益『分類』に「成都に大城有り、西に少城有り。城外の小城は、戦国の時、張儀築けり」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げるが、「小城」の「小」字を上文に涉つて「少」に誤る。

梓州は東にあり、それで「東行」という。「且つ未だ回らず」は、乱

を避けて梓州に来てより、いたずらに西のかた成都を望むばかりで、しばらくまだ「回」ることができない、と言っているのである。「茅齋」は、ほかならぬ浣花草堂。「寄在」の二字は、棄て去るに忍びない意をあらわす。それに妻子は今も彼の地にあり、胸中を傷ませるゆえんである。「少城」は、城外の小城で、成都大城の西にある。戦国時代に張儀が築いたものと伝えられている。

離邊老卻^ニ陶潛^ノ菊 江上徒^ニ逢^ニ袁紹^ノカ杯

※老却:スガレハテン

公隱棲種^ノ菊^ヲ、故^ニ自況^ニ陶潛^ニ。此應^ニ起句^ノ秋盡^ニ、想^ニ其無^レ主

而徒^ニ衰^レ也。後漢鄭玄^ノ傳^ニ、袁紹總^ニ兵^ヲ冀州^ニ、大^ニ會^ニ賓客^ニ。

遣使^ヲ要^ニ玄^ヲ、玄最後^ニ至^ル。乃延^ニ升^ニ上座^ニ。飲^ニ酒^ヲ一斛^ヲ。容儀

溫偉[、]傾^ニ倒^ス一座^ヲ。玄爲^ニ儒^上而遭^ニ世難^ニ、故^ニ公自^レ比^ス。蓋指^ニ嚴

武綿州^ノ別宴^ヲ也。舊注引^ニ河朔避暑^ノ飲^ヲ、殊^ニ無^ニ干涉^一。

(注9) ちなみに、陶淵明については、前出042「江上、水海勢の如くなるに値

ひ、聊か短述す」詩の(注23)に挙げた以外に、

・濁酒陶令を尋ね、丹砂葛洪を訪ふ

・「河南の韋尹文人に寄せ奉る」詩、詳註巻一)

・陶潜は俗を避くるの翁なるも、未だ必ずしも道に達せず

・「興を遣る」五首其三、詳註巻七)

・心を寛うするは応に是れ酒なるべし、興を遣るは詩に過ぐるは無し。此の意陶潜解す、吾が生 汝が期に後る

・「惜しむ可し」詩、詳註巻十)

・他時如し県を按ぜば、陶潜を慢るを得ず

・「東津にて韋諷が閩州録事を撰るを送る」詩、詳註巻十一)

・毎に恨む陶彭沢、銭無くして菊花に對せしを

・「復た愁ふ」十二首其十一、詳註巻二十)

・という例がある。

(注10) 「後漢書」鄭玄伝。錢注(巻十二)に挙げ、輯註は「楊慎曰く」として引く。輯註は宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。なお、詳説には「会粹」(巻十一)の同様の注を引く。

〔注11〕 錢注及び輯註に「公、玄を以て自ら況ふ。儒と為つて世難に逢ふなり」と。輯註は宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

ちなみに、「儒と為つて」云々は、中唐・盧倫（七四八？～七九八？）の「長安春望」詩（『唐詩選』巻五）に「誰か念はん儒と為つて世難に逢ふを、独り衰鬢を將て秦関に客たらんとは」というのに基づく。

〔注12〕 『杜詩偶評』（巻四）に「鄭玄を以て自ら比す」と。

〔注13〕 （注3）に挙げたように、「嚴侍郎を送つて綿州に到り、同に杜使君が江樓に登つて宴す」詩がある。

なお、仇兆鰲は「江上の杯は、蓋し李梓州を主と為すなり」（評註巻十一）といい、また陳貽燠『杜甫評伝』第十四章第四節には「袁紹の杯は、当地の官府の酒筵を喩える」とし、梓州刺史の宴席に招かれたことをいうとする。

〔注14〕 邵傳『集解』に「袁紹の杯」の下に「河朔避暑飲」と注し、薛益『分類』に「典略に云ふ、劉松・袁紹、河朔に在り。三伏の際、尽日酣飲して、以て一時の暑を避く。号して河朔の飲と為す」と。これは、『集千家註』（巻七）に王洙の注として引くのに拠る。「分類」は宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

〔注15〕 錢注及び輯註に「旧注、河朔の飲を引くは是に非ず」と。輯註は宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。なお、詳説には『会粹』の同様の注を引く。公は隠棲して菊を植えたので、それで自らを（陶潜）になぞらえる。これは起句の（秋尽）に対応している、その主がいままま徒らに衰えるのを思いやるのである。『後漢書』鄭玄伝に、「袁紹は冀州に兵を擁し、大いに賓客を会した。使者を遣わして鄭玄を招請したところ、鄭玄は最後にやつてきた。そこで上座に招き入ると、酒を飲むこと一斛。身のこなしは温雅で威嚴があり、一座を圧倒した」とある。鄭玄は儒者として乱世に遭遇したので、それゆえ公は自らを比した。けだし嚴武の綿州での別宴を指すのであろう。旧注に河朔に避暑して飲むことを引くが、全く関わりがない。

雪嶺獨看西日、落（注16）

雪嶺ハ即雪山、見（注16）前。應是秋已（注16）有雪。蓋望（注16）成都マ、惟見（注16）雪

山マ。落日銜（注16）山、暮景蕭然（注16）也。劍門ハ即劍閣（注16）。自蜀赴（注16）中原、道皆（注16）繇此。其險比（注16）關門マ、故曰（注16）劍門ト。時（注16）徐知道雖（注16）爲（注16）其下ノ所ト殺、餘兵未（注16）平、道路梗塞。故曰（注16）猶阻（注16）北人ノ來マ。

〔注16〕 中原ノ消息不（注16）可（注16）得（注16）聞（注16）也。

〔注17〕 詳解に「西山は蜀の西陲に在り、一名雪山」と。

〔注18〕 薛益『分類』に「蜀自（注16）漢中に出づる、道皆（注16）此に繇（注16）」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

〔注19〕 輯註に「時に徐知道、其の下の為に殺されると雖も、其の兵尚ほ劍閣に拠る。故に（猶ほ阻つ北人の来るを）と曰ふ」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。なお、詳説には『会粹』の同様の注を引く。

〔雪嶺〕は、ほかならぬ雪山で、前に見える。秋にはもう雪があつたのに違いない。けだし成都を望んでも、ただ雪山が眼に入るだけで、落日が山にかかり、暮れなずむ景色はもの寂しく蕭然としているのである。（劍門）は、とりもなおさず劍閣のこと。蜀から中原に赴くのに、道はどれもここを経由する。その險を関門に比して、それゆえ（劍門）という。時に徐知道は部下に殺されたとはいへ、残余の兵がまだ平定されず、道路はふさがれていた。それゆえ（猶ほ北人の来たるを阻つ）という。中原の消息を聞くことができないうを嘆じているのである。

不（注16）辭（注16）萬里長（注16）爲（注16）客ト 懷抱何（注16）時（注16）得（注16）好開（注16）ト

※不辭：クルシカラヌ

不（注16）辭（注16）猶（注16）言（注16）不（注16）厭（注16）。蓋強（注16）自安（注16）スル也。懷抱（注16）胸臆（注16）也。好開（注16）快然開

散也。此承（注16）五六（注16）相引（注16）而下（注16）。萬里（注16）爲（注16）客ト、長（注16）滯（注16）二（注16）天涯（注16）、良（注16）

可（注16）哀（注16）矣。然（注16）亦（注16）不（注16）敢（注16）辭（注16）也。蓋故郷（注16）ハ不（注16）可（注16）得（注16）而歸（注16）一（注16）已。只

得（注16）還（注16）浣（注16）花（注16）草堂（注16）、與（注16）二（注16）妻子（注16）慰（注16）中（注16）懷（注16）抱（注16）上（注16）マ、斯可（注16）ナリ（注16）矣。而此猶且

未^レ有^レ期、尤^レ可^レ哀之甚也。夫^レ公在^二浣花草堂^一、固^{ヨリ}是^二萬里ノ孤客^一、今乃亂離如^レ此、卻^テ望^二成都^一是^二故郷^一、故^ニ作^二不^レ得^レ已^一コトヲ之辭^ニ耳。

(注20) 何か基づくところあるか、不明。ちなみに、王雲陸『六朝詩歌語詞研究』(黒龍江教育出版社、一九九九年)によれば、「不辭」は、六朝以来

の俗語で、「不怕」(恐れぬ)、「不顧」(かまわない)の意。

(注21) 顧宸『註解』に「按ずるに、公、梓自り成都に至つて家を移す。復た成都自り梓に入る、往來遷徙の勞、匍匐道路の苦、奚んぞ畜^タだ万里長く客為^ルのみならん。然れども亦た敢へて辭せざるなり」と。宇都宮逸庵の増広本にも挙げる。

(注22) 『聯珠詩格』(第二十)や『唐詩選』(巻七)に、中唐・賈島(七七九-八四三)の作として載せる七絶「柔乾を渡る」詩に「却つて并州を望めば是れ故郷」と。但し、この詩は賈島の作ではなく、劉皂の「朔方に旅次す」詩(『全唐詩』巻四七二)である。李嘉言『長江集新考』(上海古籍出版社、一九八三年)参照。

《辭せず》は、厭わずと言ふのとほぼ同じ。けだし強いて自ら安んずるのであろう。《懷抱》は、胸臆である。《好く開く》は、さつぱりと開き散ずることである。これは五六句を承け相引いて言い下している。《万里》の果てに《客と為》つて、《長》く天涯に滞っているのは、まことに哀しむべきことだ。さりながら、やはり敢えて《辭》さないのである。けだし故郷には帰る機会を得ないでいるのだが、ただ浣花草堂にもどつて、妻子と《懷抱》を慰められたなら、それでよいのだ。されどそれすら何時になるのかあてはなく、もつとも哀しいかぎりである。そもそも公が浣花草堂にいるのは、もとより《万里》の孤《客》であるのに、今やなんと騒乱のためにかかる具合に流離しており、ふりかえつて成都を望めばそれが故郷と思われ、それゆえどうにもやむをえない辭をなしているのだ。

046 野望

此亦在^二梓州^一之作。

これも同じく梓州での作。

金華山北涪水西 仲冬風日始^テ淒淒

※淒淒：ジミク

北^一二作^レ南^一、似^レ是。金華山在^二梓州射洪縣北二里^一。涪音浮。涪江源出^二西羌^一、自^二三州東南合^二射洪江^一。此野望所^レ見、言^二梓州之境、山川環抱^一也。淒淒、寒冷ノ貌。南州地暖、故^ニ仲冬始^テ有^二淒淒之景^一也。

(注1) 錢注(巻十二)及び輯註(巻九)に「一に南に作る」と。輯註は宇都宮逸庵の増広本に挙げる。

(注2) 『大明一統志』巻七十一、潼州府の山川の条に、金華山を載せ「射洪県の北二里に在り」と。輯註に挙げ、宇都宮逸庵の増広本に引く。

(注3) 薛益『分類』(巻二、眺望)に「音浮」と。宇都宮逸庵の増広本に挙げる。ちなみに、邵傳『集解』には「音抔」と注する。

(注4) 邵宝『集註』(巻二十三、樓閣類)及び薛益『分類』に「涪水、原は西羌より出て、州の東南自り流れて射洪江に合す」と。羌はチベット系遊牧民で、漢代に西羌と称された。『後漢書』に西羌伝がある。ここでは、その居住地域をいう。『分類』は宇都宮逸庵の増広本に、『集註』は詳説に挙げる。

(注5) 南州は、南方の地。古くは『楚辭』遠遊に「南州の炎徳を嘉し、桂樹の冬榮を麗しとす」と見える。ここでは梓州を指して言う。

(注6) 邵宝『集註』及び薛益『分類』に「淒淒は、射洪の地寒少なし。故に仲冬始めて淒淒の景有り」と。『分類』は宇都宮逸庵の増広本に、『集註』は詳説に挙げる。

《北》は、一に《南》に作るが、その方がいいようだ。《金華山》は、梓州射洪県の北二里にある。《涪》、字音は浮。涪江の源は西羌に発し、州の東南より流れてきて射洪江に合わさる。これは《野望》して眼に入ったもので、梓州の境を山川がぐるりと取り巻いていることを言うのである。《淒淒》は、寒冷のさま。南方は土地が温暖で、それゆえ《仲冬》になつてやっと《淒淒》とした景色があるのであ

る。

山連^(注8)越^(注8)嶺^(注8)蟠^(注8)三^(注8)蜀^(注8)

水散^(注8)巴^(注8)渝^(注8)三^(注8)下^(注8)五^(注8)溪^(注8)

※蟠：クルリト、リマキ 散：チラバリ 下：キタル

以^(注8)三起句ノ山水二字ヲ分承ク。與^(注8)立春吹笛ノ二詩ノ同格^(注8)。嵩^(注8)悉^(注8)委^(注8)反^(注8)。越^(注8)嶺^(注8)ハ郡ノ名。本益州西南ノ外夷^(注8)。漢武帝開置ク。自^(注8)是高山相連^(注8)至^(注8)蜀、蓋^(注8)數千里ナリ矣。蟠^(注8)猶^(注8)猶^(注8)包^(注8)也。秦置^(注8)蜀郡^(注8)。漢高祖置^(注8)廣漢郡^(注8)。武帝又分^(注8)置^(注8)犍爲郡^(注8)。後人謂^(注8)之^(注8)ヲ三蜀ト。散^(注8)ハ散漫也。巴渝^(注8)ハ水ノ名。在^(注8)重慶府ノ城東^(注8)。五溪^(注8)ハ卽武陵溪^(注8)。謂^(注8)雄溪

楠溪^(注8)酉溪^(注8)沅溪^(注8)辰溪^(注8)。本蠻夷ノ所^(注8)居、在^(注8)湖廣辰州^(注8)界^(注8)。蓋^(注8)涪水至^(注8)巴渝^(注8)合^(注8)岷江^(注8)。散漫^(注8)爲^(注8)洪流ト、而五溪^(注8)水^(注8)下^(注8)入^(注8)焉。上句目極^(注8)西南^(注8)、荒山連亘^(注8)、環^(注8)抱^(注8)蜀川^(注8)。下句目極^(注8)東南^(注8)、長流散漫、來^(注8)自^(注8)蠻夷^(注8)。眼力^(注8)所^(注8)窮^(注8)、曠^(注8)濶無^(注8)際^(注8)、自^(注8)恨^(注8)身^(注8)來^(注8)僻陋^(注8)之鄉^(注8)、何^(注8)得^(注8)不^(注8)傷^(注8)神^(注8)乎。斷句故^(注8)曰、目極^(注8)傷^(注8)神^(注8)。

〔注7〕顧宸『註解』に「次聯は山水の二字を以て分承す。立春・吹笛二詩と同格」と。これは、薛益『分類』に「次聯は申べて山水を詠す。首に山水の二字を出だす。立春・吹笛の二格と同じ」とあるのを踏まえる。『註解』は宇都宮遯庵の増広本に挙げる。

〔立春〕詩（詳註卷十八）の前半四句には、
春日春盤細生菜 春日春盤 生菜細なり
忽憶兩京全盛時 忽ち憶ふ兩京全盛の時
盤出高門行白玉 盤 高門より出でて白玉を行び
菜傳纖手送青絲 菜 纖手より伝はりて青糸を送る
とあり、また091「吹笛」詩（詳註卷十七）の前半四句には、
吹笛秋山風月清 笛を吹いて秋山風月清く
誰家巧作斷腸聲 誰が家ぞ巧みに断腸の声を作す
風飄律呂相和切 風は律呂を飄して相和して切なり
月傍關山幾處明 月は関山に傍うて幾処か明かなる
と詠じられ、東陽の詳解に「風月分頂、春日春盤・金華山北の二首と同格」という。

〔注8〕『集千家註』（卷九）に見え、宇都宮遯庵の増広本に挙げる。悉委の反

は、スイ。

〔注9〕邵宝『集註』及び薛益『分類』に見える。『分類』は宇都宮遯庵の増広本に、『集註』は詳説に挙げる。なお、原文は送り仮名の「ノ」を「ヲ」に作るが、恐らくは誤り。

〔注10〕輯註に「漢書に、越嶲郡は、本と益州西南の外夷」と。宇都宮遯庵の増広本にも引く。但し、『漢書』には、そのままの記述は見あたらず、その地理志や西南夷伝を踏まえてかく言うのであろう。

〔注11〕輯註に「常璩が蜀志に、秦、蜀郡を置く。漢の高祖、広漢郡を置く。武帝又た分ちて犍爲郡を置く。後人之を三蜀と謂ふ」と。宇都宮遯庵の増広本にも引く。常璩の蜀志は、『華陽国志』の蜀志。

〔注12〕邵傳『集解』に「巴渝は、二水の名」と。なお、『大明一統志』卷六十九、重慶府の条に、「巴江」について「府城の東北に在り」、「渝水」については「府城の下に在り」と。

〔注13〕輯註に「水経注に、武陵に五溪有り。雄溪・楠溪・力溪・濼溪・酉溪を謂ふなり」と。宇都宮遯庵の増広本にも引く。『水経注』は、卷三十七、沅水の条に見える。

〔注14〕薛益『分類』に「五溪は馬援、五溪の蠻夷を撃つ。雄嶺西沅辰を謂ふ。湖広辰州の界を謂ふなり」と。湖広は、明代に置かれた湖広布政使。辰州は、今の湖南省沅陵県。宇都宮遯庵の両著に挙げる。

〔注15〕輯註に「涪水是渝州に至って岷江と合す。忠浩に至つて以下、五溪の水來たりて入る焉。蓋し大勢を約略して之を言ふ」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げるが、「至忠浩以下五溪、水來入焉」と訓点を施す。

〔注16〕ちなみに、宇都宮遯庵の詳説は、第四句の「下五溪」を「五溪に下る」と訓じて「水ハ巴渝ノ二州ニ分散シテ又合流シテ五溪ヲ下ル」と説く。なお、鈴木虎雄『杜少陵詩集』（卷十二）も「五溪に下る」と訓ずるが、「水流は巴州渝州の地方に散らばつてさらに五溪の方へくだる」と解する。

〔注17〕『夜航詩話』卷三に「平衍の田野、之を川と謂ふ」として、「蜀中に川と曰ふも、亦た其の峽に入る数百里、始めて平野を得、豁然として広衍なるを謂ふ。范成大の詩に（此れ従り蜀川は平にして掌に似たり、更に高処の東呉を望む無し）と是れなり。岷江・沱江・黒水・白水の四大川を取り、以て名と為すを謂ふは、蓋し後世の説のみ」と。南宋・范成大

の作は「望郷台」詩（『石湖居士詩集』卷十）。後世の説、その一例は、明・楊慎『丹鉛總錄』卷二、「丹鉛摘錄」卷五に見える。

起句の〈山〉〈水〉の二字をそれぞれ分けて承ける。「立春」「吹笛」の二詩と同格。〈嶺〉は、悉委の反。〈越嶲〉は、郡の名。もと益州西南の外夷。漢の武帝が開置した。ここから高い山々が連なつて蜀に至るが、けだし数千里にわたつて続くのである。〈蟠〉は、包とほぼ同じ。秦が蜀郡を置き、漢の高祖が広漢郡を置いた。武帝がさらに犍為郡を分置した。後人はこれを〈三蜀〉という。〈散〉は、散漫である。〈巴渝〉は、水の名。重慶府の城東にある。〈五溪〉は、すなわち武陵溪。雄溪・楠溪・沅溪・辰溪のこと。元來が蛮夷の居住地で、湖広辰州の境にある。けだし〈涪〉水は〈巴渝〉に至つて岷江に合流し、散漫とちらばつて大きな流れとなり、〈五溪〉の水が〈下〉り注ぐ。上句は、〈目〉が西南を〈極〉めると、荒山が連なりわたり、蜀の平野をぐるりと取り巻いている。下句は、〈目〉が東南を〈極〉めると、長流がちらばつて、蛮夷の方からやってくる。見渡すかぎり、広々として極まりなく、身は僻陋の郷に來たのを恨み、どうして心を傷めずにおれようか。断句は、それゆえ〈目極りて神を傷む〉という。

獨鶴不レ知何事ニ舞

餓鳥似レ欲スルニ向テ人ニ啼ント

※何事：ナニガウレシクテ

此寫近景ヲ。何事ハ猶レ言ニ何故ト。訝怪ム之辭。人ハ公自謂也。獨鶴餓鳥竝ニ野望所レ見、風日凄凄中之景。蓋獨鶴孤寂、應ニ無レ意ニ於舞ニ、而踴躍自樂ム。故ニ曰不レ知何ノ故ニ乃爾。訝ニ其無情ト也。餓鳥憔悴、哀鳴之切ナル、似レ欲スルニ向我ニ而告ト其苦ヲ。李義山雜纂ニ所謂鴉似ニ措大ニ、饑寒則吟。同病相憐、尤可レ悲也。皆公因テ己ニ相感シ、鍾情之極、生ニス癡想ト。殆有ニ欲レ哭レト之意ト。
(注18) 釈大典『詩語解』卷上に「瀟湘ヨリ何事等閑ニ回レ、問フ君不レ飲真ニ何事、猶ニ何故也」と。

(注19) 顧宸『註解』に「獨鶴餓鳥も亦た野望の見る所。公、此の風日正に凄なるに当たつて、景に触れて愁悶す」と。宇都宮遜庵の両著にも引く。

(注20) 『義山雜纂』の「相似」の条。措大は、(貧乏) 書生。

(注21) 訳注稿(六)、033「裴迪蜀州の東亭に登つて客を送り早梅に逢いて相憶うて寄せらるるを和す」詩の(注20) 参照。

これは近景を写す。「何事」は、何故と言うのとほぼ同じ。いぶかり怪しむ辭。「人」は、公自らの称である。「獨鶴」「餓鳥」は、ともに「野望」して眼に映つたもので、「風日」の「凄凄」たるなかの景色。けだし「獨鶴」はひとりぼっちで、「舞」うつもりはないはずなのに、ふらふらと舞い歩いて自ら楽しんでゐる。それゆえ、いったい何故にそうするのかという。その無情をいぶかるのである。「餓鳥」は憔悴し、哀鳴の痛切さは、自分にその苦しみを告げようとしているかのようなのである。『李義山雜纂』にいわゆる「鴉は措大に似、饑寒すれば則ち吟ず」で、同病相憐んでおり、とりわけ悲しむべきことだ。いづれも公は自身の境遇によつて心感じ、感情が極まつたあげく、かかるたわけた感想を生じた。ほとんど哭さんばかりという意がある。

射洪ノ春酒ハ寒シテ仍綠アラシク 目極ラテ傷レハ神ヲ誰カ爲ニ攜ラン

※寒：フユガレニモ 緑：ミソゴト

既ニ野望傷レ神ヲ、又無ニ酒ノ可レ飲。射洪出ス美酒ヲ、因テ憶レ之ヲ。何人ガ爲ニ我攜來、一醉ヲ消シテ此愁ニ乎。稱シテ美酒ヲ曰ニ春酒ト、取ニ春ノ字ヲ美好富盛之意ト。故ニ唐人名レニ酒ニ多ク以テ春、如ニ麴米春梨花春金陵春若下春、是也。綠ノ字ハ形容其美ヲ、皆反ニ照シテ風日凄凄及獨鶴餓鳥ニ用レ之ヲ。寒仍綠ハ言當ニ此寒候ニ、仍凝ニ春色上ト也。目極ハ楚辭ノ語、應ニテ上半ニ用レ之ヲ。

(注22) 邵傳『集解』に「射洪の美酒、誰か我が爲に携え來たり、一醉して愁を消さんや」と。

(注23) 訳注稿(二)、002「鄭駙馬潛曜洞中に宴す」詩の詳解に「春酒は美酒を謂ふ。必ずしも春釀すに非ず。春の字、富貴の意有るを取るのみ」と。

〔注24〕 073 「悶を撥ふ」詩（詳註巻十四）に「聞道らく雲安の麴米春、纒かに一盞を傾ければ即ち人を醺ず」とあり、詳解に「麴米春は酒の名。唐人多く春を以て酒に名づく。松醪春・石凍春の如し。詳らかに東坡志林に見ゆ」と注する。

『東坡志林』巻五に「退之の詩に曰く、百年未だ満たざれば死するを得ず、且つ勲に買ふ可し抛青春と。国史補に云ふ、酒に郢の富春、烏程の石凍春、劍南の焼春有り。杜子美云ふ、聞道らく雲安の麴米春、纒かに一盞を傾ければ、便ち人を醺ずと。裴鉞伝奇を作り裴航の事を記すに、亦た酒有り松醪春と名づく。乃ち知る唐人酒に名づくるに多く春を以てするを。則ち抛青春も亦た酒の名なり」と見える。退之は、中唐・韓愈の字。その詩は、「杏花」四首其四。但し、勲字を動に作る。『国史補』は、中唐・李肇の著。その巻下に見える。

また明・胡震亨（一五六九—一六四五）の『唐音統籤』巻二十、詠箋五、酒名春の条には、「東坡云ふ、唐人酒多く春を以て名づく。今、具に一二を列す」として、金陵春・竹葉春・麴米春・抛青春・梨花春・若下春・石凍春・土窟春・焼春・松醪春の名を挙げて、その出処を注記する。

〔注25〕 『楚辞』巻九、「招魂」に「目千里を極め春心を傷む」と。『文選』巻三十三にも収む。

〈野望〉して〈神を傷め〉るばかりか、飲める〈酒〉もない。〈射洪〉は美酒の産地であることから、それでこれを忘れずに思う。何人が私の〈為〉に〈携〉えて来て、一酔してこの愁いを消させてくれるのか。美酒を称して〈春酒〉というのは、〈春〉字に美好富盛の意があるのを取る。されば唐人は酒の名に多く春字をつけており、麴米春・梨花春・金陵春・若下春のような例がそうである。〈緑〉は、その美なるを形容する。いづれも〈風日凄凄〉及び〈獨鶴〉（饑鳥）に反照して用いている。〈寒うして仍ほ緑ならん〉は、この〈寒〉い時候でも、やはり相変わらず春色を凝らしているのを言うのである。〈目極む〉は、『楚辞』の語で、前半部に対応して用いる。

047 聞官軍收河南河北

一ニ云收二兩河一ヲ。唐書寶應元年十月、僕固懷恩屢破三史朝義兵一ヲ、進テ取テ東京ヲ、河南平シ。次年正月、朝義走テ河北ニ、懷恩遣兵一ヲ追テ及レ之ニ。朝義自殺。其將李懷仙以三幽州ヲ降リ、田承嗣以三魏博ヲ降ル、河北平シ。公在蜀聞捷音ヲ、喜テ作此詩一ヲ。時三代宗廣德元年也。

〔注1〕 錢注（巻十二）及び輯註（巻九）に指摘。輯註は、宇都宮遷庵の増広本に挙げる。

〔注2〕 輯註に「唐書に、宝應元年冬十月、僕固懷恩等、屢しば史朝義の兵を破り、進んで東京を克す。其の將薛嵩は相・衛二州を以て降り、張志忠は桓・趙等の州を以て降る。次年の春正月、朝義走りて広陽に至り、自縊す。其の將田承嗣は莫州を以て降り、李懷仙は幽州をもつて降る」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。『而庵說唐詩』（巻十九）に「薊北を収むるは、代宗の広徳元年、史朝義自殺し、其の將李懷仙は幽州を以て降り、田承嗣は魏博を以て降りるなり」と。

一に「兩河を収む」と云う。『唐書』に「宝應元年（七六二）十月、僕固懷恩しばしば史朝義の兵を破り、進軍して東京を奪回し、河南は平定された。翌年正月、朝義は河北に逃げ、懷恩は兵を派遣して追及し、朝義は自殺した。その部將の李懷仙は幽州を以て降り、田承嗣は魏博の二州を以て降り、河北は平定された」と。公は蜀にあって勝利の報せを聞き、喜んでこの詩を作った。時に代宗の広徳元年（七六二）のことである。

劍外忽傳收兩薊北

初聞涕淚滿衣裳

※涕淚：ウレシナキ 満：ビツタリ

薊音計。薊北ハ即幽州。天寶以來、賊之窟穴。今始割除而收復之。公在蜀聞之外、忽傳中原好消息、驚喜之餘、眼淚迸り出也。

〔注3〕 訳注稿(五)、024 「別れを恨む」詩の詳解に「幽燕は、河北の州名。安史

が巢穴なり」と。

(注4) 『薛益』『分類』(巻一、述懐)に「劍外は、劍閣の外なり」と。宇都宮逸庵の増広本にも挙げる。

〈薊〉、字音は計。〈薊北〉は、幽州にほかならない。天宝以來、賊の巢窟であつたのを、今やつと根こそぎ退治してこれを回復した。公は〈劍〉閣の〈外〉にあつて、〈忽ち〉思いがけず中原の好き消息が〈伝〉わり、驚喜のあまり、眼から涙が迸り出るのである。

卻看妻子愁何在 漫卷詩書喜欲狂

※看：ナガメテ 何在：ドコヘヤラ 漫：ウケナシニ

公平時看ニ妻子ノ顔面ヲ、憫ニ其漂ニ泊ニ異郷ニ、惻然不レ勝ニ憂傷ニ。今日却テ見ニ其狀ヲ、亦皆喜色揚揚タリ、則向來所レ愁、蕩然トシテ安ニ去哉。公客居無聊、惟憑ニ詩書ニ消遣シテ過日ヲ。忽聞捷思レ歸ヲ、其攤ニ在ニ案頭ニ者、急忙漫爾ニ卷收ム。直欲ニ束装ニ也。二句寫シテ初テ聞ノ光景ニ如畫ニ。蓋喜不ニ自禁ニ、身若レ欲スル飛ニ也。

(注4) 『而庵説唐詩』(巻十九)に「而して子美妻子の顔面を見るに、絶えて平時に類せず」とあり、こは、その語を用いる。

(注5) 『而庵説唐詩』に「子美劍外に在り、惟だ詩書を以て消遣して日を過ぐすも、心は却つて此の詩書の上に在らず。河南河北已に捷音を報じ、其の得意を極む。又た何ぞ必ずしも詩書の攤かれ案頭に在る者を用着せん。手を趁ふて一総に捲き去り、他の是れ詩是れ書、一類と二類に非ざるとを管せざるなり」と。攤は、並べ開く。趁手は、手当たり次第。一総は、すべて。

(注6) 『而庵説唐詩』に、(注5)に挙げた箇所に続いて「初めて聞くの光景を写して画くが如し」と。

(注7) 『而庵説唐詩』に「知らず何年何月何時に在つて好消息を聴き得んかと謂ひしに、今一たび伝はりて耳に到る、且らく事の虚実を問はず、喜び自ら禁へず、身飛んで何を為さんかと欲するが若し。初め聞きて眼涙迸り出づ」と。

公はふだん〈妻子〉の顔をみて、その異郷に漂泊するのを憫れみ、いたわしく思つて憂傷にたえずにいた。今日〈却つて〉その様子を

みると、やはりみんな生き生きと嬉しそうな顔をしており、さすればこれまで〈愁〉えていたのがきれいさっぱりなくなつてどこかへすつとんでしまつた。公は客寓の無聊の身で、ただ〈詩書〉によつて気晴らしをして日を過していたが、〈忽ち〉捷報を聞いて故郷に帰らんことを思い、机上に広げてあつたのを、あわててわけもなく〈巻〉き収めた。直ちに身仕度しようとするのである。二句は〈初めて聞〉いたときの光景を写して面に描いたようである。ただし〈喜〉んで自らを押さえきれず、身は飛びあがらんばかりであつたのだらう。

白首放歌須縦酒 青春作伴好還鄉

※縦：ノミキル 作伴：ミチヅレ

白首放歌、即承ニ喜テ欲ラレ狂セント、幾ト忘テ其首之白ヲ、而狂態莫レ禁ニ也。作ハ伴ヲ承ニ妻子ヲ。即將ニ妻子ヲ作ニ旅行ノ伴侶ト也。蓋公聞ニ兩河ノ捷音ヲ、喜得テ老ヲ見ニ太平ヲ、便忘ニ其衰白ヲ而快然放歌シ、更ニ須置酒縦飲シテ盪滌ス平昔之鬱懷ヲ。時亦屬ニ青春ニ、旅行好時節。直ニ可テ趁ニ此時ヲ挈レ眷ヲ伴ニ還レ郷ニ、其樂爲ニ何如ト哉。全唐詩ニ首作レ日ニ、非。

(注8) 顧宸『註解』に「且つ放歌し且つ酒を縦にす、幾んど其の首の白きを忘れて、狂態禁すること莫し」と。宇都宮逸庵の増広本にも挙げる。

(注9) 『全唐詩』巻二二七。錢注及び輯註も同じ。また『杜詩偶評』(巻四)も白日に作る。

〈白首放歌〉は、びたつと〈喜びて狂ならんと欲す〉を承け、ほとんどその〈首〉の〈白〉いのも忘れて、狂態をとめられないのである。〈伴〉を作すは、〈妻子〉を承ける。〈妻子〉を旅行の伴侶とすることに他ならない。ただし公は兩河の捷音を聞いて、老いて太平を見ることのできたのを喜び、すぐさまその白髪頭の老いばれであるのを忘れて心ゆくまま〈放歌〉し、さらにはぜひと酒を用意し〈縦〉に飲んで、かねてよりのむすばれた胸のうちをきれいさっぱり洗い流さねばならない。時あたかもやはり〈青春〉に属し、旅行の好時

節であり、ただちにこの時ぞばかり家族を携え（伴と作）して（郷に還る）ことができる、その楽しみはいかばかりであろう。『全唐詩』に（首）を（日）に作るの、よくない。

即從巴峽穿巫峽 便下襄陽向洛陽

※即：スグサマ 穿：クバリヌケテ 便：ツイ

即ハ當即也。聞捷即欲還郷。一若下不待束裝而上路。路爲快者。便ハ隨便也。有忽已意。見下江之易。

兩山夾水曰峽。渝州巴縣有明月峽石洞峽等。總謂之巴峽。蜀船入峽之始也。巫峽即其下流。所謂三峽之一。在夔州巫山之下。水經注三峽七百里中。兩岸連山。畧無闕處。重巖疊嶂。隱日蔽天。自非亭午夜分。不見曦月。其隘且脩。如此。巫峽之間一百六十里。最險而狹。故曰穿。襄陽屬楚。即明湖廣襄陽府。既出峽而赴襄陽。順流而東。故曰下。此皆歸路所經歷。洛陽ハ即公ノ故郷。自襄陽上陸而北。故用向字。上ノ句最妙。大白所謂輕舟已過萬重山之意。便下襄陽。亦千里江陵一日還也。總寫歸興ノ神理如見。先預筭路程。歸意切ナルコト甚矣。公自註余田園在東京。公雖生於長安。實乃洛陽人。又其先襄陽人。後徙洛陽。則襄陽亦先隴所在。故其下楚江。至此舍舟而上也。胡元瑞云。老杜好句中疊疊用字。如下桃花細逐楊花落。便下襄陽向洛陽之類。頗令人厭。宋人競相祖襲。尤可厭也。此信愛而知其惡也。

（注10） 積大典『詩語解』卷下、「便」の条に「即、當即也。便、隨便也」と。當即は、俗語で、間髪を入れずぐに。ただちにの意。

（注11） 『而庵說唐詩』に「合一句は、是れ婦へらんことを説着して、妻子飛び得て起たざる無く、一に束装を待たずして即ち路に上るを快とする者に似たり」と。

（注12）（注10）参照。やはり俗語で、そのまますぐにの意。なお、積大典『詩語解』卷三、「便」の条には「又、俗語ニ隨便アリ。雅文ニ用ルコトナシ。然ルニ清朝ノ文ニ隨便ヲ用タルアリ」と。

（注13） 訳注稿(六)、037「韓十四の江東に省観するを送る」詩の詳解に「山、水を夾むを峽と曰ふ」とあり、その（注14）参照。

（注14） 例えは、『太平寰宇記』卷一三六、渝州巴県の条に「州の東北二十里に石洞峽有り」、「明月峽は県の東八十里に在り」と見える。

（注15） 『水経注』卷三十四、江水に「其の首尾の間百六十里、之を巫峽と曰ふ。蓋し山に因つて名を為すなり。三峽七百里の中より、兩岸連山、略ぼ闕くる処無し。重巖疊嶂、天を隠し日を蔽ひ、亭午夜分に非ざる自りは、曦月を見ず」と。

（注16） 顧宸『註解』に「峽險にして狭し、故に穿つと曰ふ」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

（注17） 顧宸『註解』に「襄陽は楚に属す」とあり、薛益『分類』に「襄陽は湖広に属す」と。いずれも、宇都宮遯庵の増広本に引く。なお、『大明一統志』卷六十、襄陽府に「春秋の時、楚に属す」と。明代では、湖広布政使の所轄であつたこと、「一統志」卷五十九参照。今の湖北省襄樊市。是れ一水の地、故に下の字を用ふ」と。

（注18） 『而庵說唐詩』に「洛陽は是れ陸路、又た路を換へて去くを要す。故に向の字を用ふ」と。

（注19） 『而庵說唐詩』に「洛陽は是れ陸路、又た路を換へて去くを要す。故に向の字を用ふ」と。

（注20） 太はの訛字。李白の「早に白帝城を発す」詩（『唐詩選』卷七）に、朝辭白帝彩雲間 朝に辞す白帝彩雲の間 千里江陵一日還 千里の江陵 一日にして還る 兩岸猿聲啼不住 兩岸の猿声 啼いて住まざるに 輕舟已過萬重山 輕舟已に過ぐ万重の山

（注21） 『而庵說唐詩』に「此れ聞過して即ち還らんと欲するを写し、神理見るが如し」と。神理は、心の動く筋道。

（注22） 『杜詩偶評』に、第七句の右傍に「預め帰程を計る」と注す。

（注23） 顧宸『註解』に「公の先は襄陽の人為り。祖依藝、鞏の令と為り、河南に徙る。父閑、奉天の令と為り、又た杜陵に徙る。公、杜陵に生まるるも、其の田園は則ち洛陽に在り」と。宇都宮遯庵の両著にも挙げる。

なお、詠注稿(一)、「杜文貞公伝」に「公生于杜陵、其田園則在洛陽」というのは、この記述を襲うものである。

(注24) 明・胡應麟(字は元瑞)の『詩藪』内編卷六、近体中・七言に「老杜好んで句中に字を疊用す。惟だ《落花遊糸》妙絶。此の外、《高江急峡》《小院廻廊》の如きは、皆排比妙処に關する無し。又た《桃花細に楊花を逐つて落つ》、《便ち襄陽に下つて洛陽に向ふ》の類の如きは、頗る人をして厭はしむ。唐人述ぶる者絶えて少なし。而れども宋世、黄・陳競つて相祖襲す」云々と。

《落花遊糸》は、詠注稿(三)、011「省中の院壁に題す」詩の第三句。《高江急峡》は、090「白帝」詩の第三句。《小院廻廊》は、048「涪城縣香積寺の官閣」詩の第五句。《桃花》云々は、詠注稿(四)、014「曲江酒に對す」詩の第三句。黄・陳は、北宋の黄庭堅と陳師道。

(注25) 『札記』曲礼上に「賢者は狎れて而かも之を敬し、畏れて而かも之を愛し、愛して而かも其の悪を知り、憎んで而かも其の善を知り、積んで而かも善く散じ、安に安んじて而かも能く遷る」と。

《即》は、当即である。捷報を聞いて、すぐさま《郷に還》ろうとする。まるで身仕度もそこそこに旅路に上るのを痛快がる者のようである。《便》は、隨便である。忽ち已にという意がある。江を下ることの容易であるのをあらわす。二つの山が水を夾むのを《峡》という。渝州巴県に明月峡・石洞峡などがあり、これを《巴峡》と総称する。蜀からの船が峡に入る始めである。《巫峡》は、すなわちその下流にあり、いわゆる三峡の一つで、夔州巫山の下にある。『水経注』に「三峡七百里の間は、兩岸に山々がほほ途切れることなく連なっている。重畳たる岩壁が太陽を隠し天を蔽ひ、真つ昼間か真夜中でなければ、日や月が見えない」と。その狭くて長きこと、かかる具合である。《巫峡》の間の百六十里は、最も険しくて狭いので、それゆえ《穿つ》という。襄陽は、楚に属する。すなわち明の湖広襄陽府。既に峡を出て襄陽に赴くのに、流れに順つて東にゆくので、それゆえ《下る》という。これはいずれも帰路の経歴するところ。《洛陽》は、とりもなおさず公の故郷で、襄陽より陸に上つて北に

ゆくので、それゆえ《向》字を用いる。上句は最も絶妙。李太白のいわゆる「輕舟已に過ぐ万重の山」の意。《便ち襄陽に下る》は、こられた「千里の江陵一日に還る」である。すべて帰興の心の動きを写して目に見るようである。先ずあらかじめ路程を計算し、帰意の切なること甚しい。公の自注に「余の田園、東京に在り」とある。公は長安で生まれたとはいへ、実はなんと洛陽の人である。それにその先祖は襄陽の人で、後に洛陽に移った。とすれば襄陽もやはり先祖の墓塋があるところで、それゆえ楚江を下り、ここで舟を捨て陸に上るのである。胡元瑞が云う、「老杜は好んで句中に同じ字を疊用する。《桃花細に楊花を逐つて落つ》、《便ち襄陽を下つて洛陽に向ふ》の類の」ときは、いささかうんざりさせられる。宋人が競つて祖述踏襲するのは、ことのほかうんざりだ。これぞまことに「愛していてもその缺点を知る」ということである。

048 涪城縣香積寺／官閣

涪城縣(屬涪州)有香積山、北枕涪江。長安終南山亦有香積寺、王維有詩。蓋名寺也。故此特以涪城縣冠之。官閣ハ迎官賓之處。蓋寺ハ在二山頂、閣ハ在二山腰也。

(注1) 『太平寰宇記』卷八十二、劍南道一、梓州涪城縣の條に「香積山は縣の東南三里に在り、北のかた涪江に枕む」と。輯註(卷十一)は錢注(卷十二)に挙げるのを引く。また顧宸「註解」にも挙げる。『註解』は宇都宮遷庵の両著に、輯註は増広本に引く。涪城縣は、今の四川省三台県の西北。枕は、臨む意。前出042「江上、水の海勢の如きに値ひ聊か短述す」詩の(注18)参照。

(注2) 王維に五律「香積寺に過る」詩があり、『三体詩』(卷三)及び『唐詩選』(卷三)に収む。なお、寺名は、『維摩經』香積仏品に「上方に圀有り、香積と号す。鉢を以て香飯を盛滿し、悉く衆僧を飽かしむ」とあるのに基づくのであろう。

(注3) 顧宸「註解」に「黄鶴曰く、長安にも亦た香積寺有り。代宗、元帥と

為つて諸軍を率ゐる香積寺に屯す、是れなり。此の寺、梓州の涪城県に在り。故に涪城県を以て之に冠す」と。宇都宮遯庵の両著にも引く。

(注4) 虞伯生の注に「天官閣は官貴を迎ふる地」と。『唐詩貫珠』(卷四十三、寺院)にも引く。『文体明弁』(卷十五、近体律詩下・七言、遊宴)には「官貴を迎ふるの所」と。

(注5) 『唐詩貫珠』に「寺は山頂に在り、閣は山腰に在り」と。山腰は、山の中腹。

〈涪城県〉は、梓州に属す。香積山があり、北は涪江に臨んでいる。長安の終南山にもやはり香積寺があり、王維に詩がある。けれど名だたる寺であったのであろう。それゆえここでは特に〈涪城県〉をもつてこれに冠している。〈官閣〉は、役人や賓客を迎える場所。けれど寺は山頂にあり、閣は〈山腰〉にあったのである。

寺下／春江深シテ不レ流 山腰ノ官閣廻シテ添ク愁ヲ

※愁：アハレ

深シテ不レ流言ニ春水瀾漫不ヲ覺ニ其流ヲ、亦見ニ風靜ニシテ波恬ナラシム。

迴ハ寥遠也。添ハ益也。愁ハ杳渺之意。謂ニ遠望クム氣色ヲ、非公自

愁ニ也。如ニ城尖路仄テ旌旆愁ニ、亦是也。蓋山下春江之漫タル、湛

湛ト若レ不レ流然リ。官閣直ニ臨レ流ニ、故ニ登レテ之ニ放レテハ、降ヲ、迴然盡テ于

一望ニ、而益ク更ニ杳渺、氣色如レ愁カ也。

(注6) 薛益「分類」(卷一、寺觀)に「江深くして流れずは、波恬かに風靜かなるを写し出す」と。宇都宮遯庵の増広本にも引く。

(注7) 何か基づくところあるのか、不明。邵宝「集註」(卷二十三、釈老類)及び薛益「分類」には「迴は遠なり」と。「分類」は宇都宮遯庵の増広本に、「集註」は詳説に挙げる。

(注8) 釈大典「杜律発揮」に見える。

(注9) 『杜律発揮』に「愁ハ溟濛杳渺之意。愁ハ見五陵ノ烟、城尖ノ路仄テ旌旆愁ヲ、西来水多シテ愁ニ太陰、皆然。非ニ憂ノ義ニ」と。

卷三の第四句。但し、見を看に作る。ちなみに、『唐詩集註』に「余按愁非憂愁、只是眇茫之意」と見える按語は、釈大典のそれ。〈城尖

に路仄きて旌旆愁ふ)は、(注10)参照。〈西来水多くして太陰愁ふ)は、133「瀟瀟」詩の第二句。

(注10) 082「白帝城の最高楼」詩の第一句。その詳解に「愁は杳渺の意。〈山腰官閣廻かにして添ます愁ふと同じ」と。

〈深くして流れず)は、春の水がひろびろとして、それが流れていることに気づかないの言い、やはり風靜かにして波穏やかなのが見てとれる。〈迴)は、寥遠である。〈添)は、益々である。〈愁)は、杳渺の意。遠く望み見た気色のことで、公自身が愁えるのではない。「城尖に路仄きて旌旆愁ふ)も、やはり同様である。けれど山下を流れる〈春江)の満ちた様子は、まんまんと水を湛えて〈流れざる)かのような。〈官閣)は間近に流れに臨んでおり、それゆえここに登つて思うさま眺めると、はるか彼方まで一望に収め、ますますさらに杳渺として、景色は愁えるがごとくである。

含ム風翠壁孤雲細ヲ 背日ニ丹楓萬木稠

※背日：ハウラテラサル、丹楓：メダシノモミヂ

含ム風若レ將ニ生セト風也。極言ニ氣色浮動、空翠欲ニ滴シ。孤

雲細ハ言ニ一帶ノ間雲傍レ山ニ搖曳スル也。背日ニ言ニ斜日臨ニ背後ニ。

丹楓ノ謂ニ春楓ノ嬾紅ヲ、不ニ必シモ霜葉ナラ。顧註ニ「春天不應レ有ニ楓ノ

丹、應テ是偶有ニ楓樹ニ、故ニ預ニ言ニ上レ之ヲ、固ニ然レ也。稠ハ繁盛也。萬

木稠ニ謂ニ諸餘ノ春樹扶疎ニ。蓋嬾楓ノ紅芽、與ニ綠樹ニ相映シ、斜陽

自レ背照シテ、色愈ク分明欲ニ浮動ニ也。一聯見ニ天氣快晴、山景

如レ畫。

(注11) 空翠は、緑の草木をいう。

(注12) 顧宸「註解」に「春天応に楓の丹有るべからず、応に是れ偶たま楓樹有り、故に預め之を言ふ」と。宇都宮遯庵の両著に挙げる。

(注13) 何か基づくところあるのか、不明。

(注14) 扶疎は、枝が四方に広がるさま。前漢・司馬相如「上林の賦」(「文選」卷八)に「垂条扶疎として、落英囀纏たり」とあり、李善注に「説文に曰く、扶疎は四布なり」と。

〔風を含む〕は、今にも風を生ぜんとするような状態である。気色浮動し、空翠滴らんとするのを極めて言う。〔孤雲細し〕は、帯のよくな閑かな雲が山に添ってたなびくのを言うのである。〔日に背く〕は、斜日が背後に臨むの言う。〔丹楓〕は、春になって楓が柔らかな紅色に芽吹いていることで、必ずしも霜葉ではない。顧註に「春に楓が丹色をしているはずがない。きつと偶然に楓の樹があつたので、あらかじめこのことを言ったのに違いない」とするのは、何とも固定観念に囚われていることだ。〔稠〕は、繁盛である。〔万木稠る〕は、ほかの樹木が枝を広げていること。けだし楓の柔らかな紅色の芽が緑の木々と相映じ、斜陽が背後からこれを照らして、色あいがいよいよよくなりとして浮かびただよわんばかりであるのだらう。一聯は天気快晴で、山の景色が絵のようであることをあらわす。小院廻廊春寂寂 浴鳧飛鷺晚悠悠

※小院：コザシキ

寂寂ハ賞ス其遠ヲ囂塵ニ。悠悠ハ静適ノ意。上ノ句閣中ノ所レ有、佛地幽深。下ノ句江中所レ見、水鳥自得ス。此聯就句對。春ノ字犯ス。

〔注15〕 邵宝『集註』に見える。宇都宮遯庵の両著に挙げる。

〔注16〕 『文体明弁』に、第五句の下に「閣中に見る所」、第六句の下に「江中の見る所」と注す。

〔注17〕 『文体明弁』に「小院廻廊の一聯は、乃ち句に就いて対する格」と。

『夜航詩話』卷二に「句中本自ら対偶を為す、之を自対体と謂ひ、亦た当句対、就句対と曰ふ。方板中に活を用ふる時に之を用ふ」と。訳注稿

四、014「曲江酒に對す」詩の〔注12〕参照。

〔注18〕 同じ字の重複を忌むことについて、例えば、三浦梅園『詩轍』卷五、

字法、禁忌に「秋圃擷餘ニ、重復ノ事ヲ論ジテ、重復ハ古人ハ寛ニスト

イヘドモ、今人ハ必厳ニスベシ」云々と。また『夜航詩話』卷四に「詩

は同字を犯すを忌む。然れども義同じからずんば重複と為さず。之を

傍犯と謂ふ」と。『藝圃擷餘』は、明の王世懋（一五三六―一五八八）著。

秋は藝の古字。

〔寂寂〕は、その俗塵の喧騒から遠ざかっているのを賞する。〔悠悠〕は、静適の意。上の句は〔閣〕中にあるもので、寺の境内は幽深である。下の句は〔江〕中に見えるもので、水鳥が楽しんでしている。この聯は就句対。〔春〕の字が重複を犯している。

諸天合ニ在ニ藤蘿ノ外 昏黑應ニ須到ニ上頭ニ

佛家有三十三天之說、故曰諸天ト。公在ニ山腰ニ望レ之ヲ、借テ

謂下ニ在山頂ニ、殿閣連レ覺テ也。合ハ猶レ當レ也。合ニ在ニ藤蘿

外ニ、謂ニ山深シテ寺不レ見、且磴道頗艱ナルヲ。昏黑、謂レ夜ヲ、且有ニ杳

然相迷之意。若要レハ、詣ニ山頂之寺ニ、登攀之遠シテ且艱ナル、須ニ至レ

夜ニ方ニ到レ也。蓋遂ニ不レ往カ也。上頭ハ即山頂也。公湯東靈湫ノ詩

亦云、東山氣鴻濛、宮殿居上頭。古樂府ニ東方千餘騎、夫婦

居上頭、本ニ諸ノ此ニ也。諸註載下隋ノ常琮對煬帝語ト、係ニ偽

蘇捏造ト。隋無ニ常琮者、併ニ人名ヲ杜撰ス之ヲ、不ニ亦甚シカラ乎。

〔注19〕 切利天のこと。欲界六天中の第二天で、須弥山の頂上、閻浮提の上、

八万由旬のところにあるという。中央を帝釈天とし四方に各八天ある

ことから、合わせて三十三天。

〔注20〕 釈大典『詩語解』卷下に、合について「猶レ當レ而語重テ也」と。

〔注21〕 「郭給事の湯東靈湫の作に同し奉る」詩（詳註卷四）の冒頭二句。

〔注22〕 清・陳廷敬『杜律詩話』に「上頭の二字、亦た自ら本づく有り。古樂

府に東方千騎、夫婦上頭に居る、是れなり」といい、更に杜甫の「湯東

靈湫」詩を挙げる。古樂府は、「日出東南隅行」（陌上桑）「艷歌羅敷行」

ともいう。「玉台新詠」卷一、「樂府詩集」卷二十八のこと。

〔注23〕 例えば、薛益『分類』に「隋の常琮、煬帝に侍して宝山に遊ぶ。帝曰

く幾時にして上方に到ると。琮曰く、昏黑須らく上方に到るべしと。左

右失笑す。帝曰く、淳古の君子なり」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げ

る。

〔注24〕 顧宸『註解』に「偽蘇注に造為すらく、常琮、煬帝に侍して宝山に遊

ぶ。帝曰く幾時にして上方に到ると。琮曰く、昏黑須らく上方に到るべ

しと。左右失笑す。帝曰く、淳古の君子なり」と。諸註沿襲せざること無

し。大噓に供するに堪ふ」と。宇都宮遯庵の両著にも挙げる。偽蘇註に

ついで、訳注稿(六)、033「裴迪蜀州の東亭に登って客を送り、早梅に逢ひて相憶うて寄せらるるを和す」詩の詳解参照。

仏家に三十三天の説があることから、〈諸天〉という。公は〈山腰〉にあつてこれを眺望している。借りて寺が山頂にあり、殿閣が甍を連ねていることをいうのである。〈合〉は、当とほぼ同じ。〈合に藤蘿の外に在るべし〉は、山が深くて寺が見えず、そのうえ石畳の路がすこぶる難儀なこと。〈昏黒〉は、夜のことで、そのうえ杳然として迷うという意がある。もし山頂の寺に詣でようとすれば、登つてゆく路が遠く険しいことから、夜になってやっとたどりつけるのである。けだしそのまま結局は行かなかつたのであろう。〈上頭〉は、山頂にほかならない。公の「湯東靈湫」詩にも云う、「東山氣鴻濛、宮殿上頭に居る」と。古楽府に「東方千餘騎、夫婿上頭に居る」とあつて、語はこれに基づいている。諸注は隋の常琮が煬帝に答えた語なるものを載せているが、偽蘇の捏造である。隋に常琮という者はおらず、人名と併せてこれを勝手にでっちあげており、なんともひどいものではないか。

049 送路六侍御入朝スルヲ

路六不レ知二何人一ナルヲ。蓋亦來テ在レシ蜀ニ也。

〈路六〉は、何人であるか分からない。けだしやはり蜀にやつて来ていたのだろう。

童穉ヨリ情親シ四十年 中間消息ニ兩チカラ茫然

※消息…オトツレ 兩…オタガヒニ

公與二侍御一係二總角一交ニ。今屈レ指ヲ四十年矣。中間各天索居ニ、彼此音信斷絶、茫然無レ聞コト事狀ヲ、不レ知二其生死一久シ矣。音問謂ニ之一消息ト、猶レ言ニ安否ト。消ハ消耗也。息ハ生息也。

（注1）顧宸『註解』に「公、路六侍御と総角の交に係る。今、指を屈すれば四十年なり矣」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。総角は、小兒の髪

型。あげまき。ちなみに、『書言故事』卷三、交情類に「総角之好」を挙げる。

（注2）各天の語、『文選』卷二十九、「古詩十九首」其一に「相去ること万餘里、各おの天の一涯に在り」と見える。また『札記』檀弓上に「吾れ群を離れて素居せること、亦た已に久し矣」とあり、鄭玄の注に「素は、猶ほ散のごときなり」と。

（注3）何か基づくところあるのか、不明。ちなみに、『文選』卷三十四、前漢・枚乘「七發」に「陽陰を消息す」とあり、その李善注に「消は減なり、息は生なり」と。なお、消息が音問の意で用いられるのは、後漢以降である。

公は侍御とは幼なじみである。今、指折り数えれば〈四十年〉になる。〈中間〉に各おの遠く隔たつて散りぢりとなり、互いに音信がぶつかりと途絶え、〈茫然〉として事情や状況を耳にすることもなく、その生死すら長い間知らずにいた。音問を〈消息〉という。安否というのとはほぼ同じ。〈消〉は、消耗である。〈息〉は、生息である。

嬰ニ爲シテ後會ヲ知ル何地ニ 忽漫ニ相逢ニ是別筵

※忽漫…オモヒガケナク

漫ハ不二分別一貌ト。因テ爲下無二標的一之辭上。忽漫ニ相逢ハ言ニ不レ期セ而會ニスルヲ。此聯倒插法ト。蓋數十年之別、一旦忽漫ニ邂逅ニ。竹馬ノ交情、何等ノ歡悅ソ。而此日之遇、即送別之筵。何ソ其聚會之難シテ而別離之易キ也。抑ク亦後來萍會、不レ知更ニ在ニ何ノ處ニ。恐ハ亦茫然無レ期耳。所ニ以レ惜コト別ヲ益ク切ニシテ、不レ勝ニ悵悵之至ニ也。

（注4）釈大典『詩語解』巻下に「韻會小補に、漫は分別せざる貌」と。韻會小補は、明・方日升撰『古今韻會舉要小補』のこと。

（注5）顧宸『註解』に「先づ後会を曰ひて、後に相逢ふを曰ふ、是れ倒挿の句法」と。

（注6）『詩経』鄭風、野有蔓草に「邂逅して相遇はば、我が願ひに適せん」とあり、毛伝および集伝に「邂逅は、期せずして会するなり」と。

〈漫〉は、分別せざるさま。そこからあてのない辞とする。〈忽漫に相逢ふ〉は、期せずして会するのを言う。この一聯は倒挿の句法。

けだし数十年別れていたのが、一旦(忽漫)に邂逅したのである。竹馬の友として、どれほど遊び心弾むことか。しかるにこの日のめぐり会いは、それがそのまま送(別)の(筵)なのだ。なんと出会いの難しく別れたやすいことか。そもそもまたこれから先ひよっこり出くわすのは、いったいどこになるやら分らない。恐らくはやはり(茫然)としてあてがえないのだ。別れを惜しむ気持ちがありますます痛切で、この上なく恨みがましい思いにたえきれないゆえんである。

不分ナリ桃花紅勝ル錦ニ 生憎ス柳絮白ニ於綿ヨリ

※不分：ハラガタツマイカハ 生憎：アラニクテラシ

不分ハ俗語。分與レ忿通ス。加テ豈ノ字ヲ看ル。言レ不勝レ忿也。古世説ニ于法開與ニ支公ニ争レ名ヲ、後ニ精漸歸レ支ニ、意甚不分。顔之推(注9)還魂記ニ昔枉テ見殺サ、實ニ所ニ不分スル、皆甚憤意。蓋ハ六朝ノ語也。註家或ハ引ニ李夫人ノ語ヲ、亦偽蘇ノ杜撰耳。生憎亦俗語。生ハ甚(注11)キ意。凡言ニ生怕生嫌生恨ト、皆是也。二句別送之景、即春色無頼、觸ニ忤愁人ニ者。蓋桃花欺レ錦、柳絮飄ス綿ヲ、本可レ悅之景。然ト愁人ハ觸景ニ傷シム情ヲ、所謂感シテ花ニ濺レ涙ヲ。今當リテ吾悲別之切(注12)ナリ、彼則レ不顧ニ人之恨ヲ、欣欣逞シテ色ヲ自得。反若ニ向レテ人相矜(注13)ルカ。故ニ曰ニ不分生憎ト。怨ニ罵其無情ナル也。鶴林玉露(注14)云、初讀テ只似ニ童子屬對之語ニ。及ニ細ニ思レ之ヲ、乃知喻コトヲ小人以ニ巧佞ニ勝ニ君子上。侍御ハ分ニ別ニ邪正ノ之官、故ニ以此告レ之。殊ニ不レ知其似ニ童子ニ。是乃情至之詞。宋儒理窟穿鑿、失ニト風人之義多シ矣。

(注7) 『夜航詩話』卷三に「不分は、六朝以来の俗語。分忿通ず。豈の字を加へて看る。豈に忿らざらんやと訓ず。忿に勝へざるを言ふなり」云々と指摘し、杜甫のこの詩を挙げて、「仇注に分弁する能はざるを言ふなり」と。東屋の秉燭談に、自ら己れの分を知らざるを謂ふなりと。俱に未だ之を深く考へざるのみ。蓋し其の人を悩ますを罵る、猶は諺に愛す可き

者を謂ひて反つて憎む可しと曰ふがごとし」という。また『葛原詩話糾謬』卷一に「ガウガワクと訳す」と。ちなみに、釈大典『詩語解』卷下に「不忿ハ言レ不勝レ忿也」とあり、大典と親交の深かつた釈六如(慈周。一七三七〜一八〇二)の『葛原詩話』卷一に、

不分、諸説アリ。杜詩仇注不分ハ不レ能分辨也。邵注二分ハ別也。言不レ能辨別也。此ニ家同シ。顧注二分ハ即不忿也。正是レ忿意。蕉中師ノ詩語解ニ、不忿言不勝レ忿也。此ノ二説同シ。東屋秉燭談ニ、不分ハ謂レ不レ自知其分也ト。此別ニ一説ナリ。法苑珠林ニ引テ冤魂志云、晋丹陽陶継之枉殺ニ一妓ヲ。陶夜夢ニ妓云、昔枉所殺、實ニ所ニ不分ト。此ノ不分ノコトキハ、不勝レ忿ニ義尤モ親シキニ似タリ。蕉中師曰、不分ハ杜詩ニ生憎ト対ス、分明ニ不勝レ忿ノ義ナリ。不レ能分辨ノ解ハ謬ト謂ヘシ。況ヤ分辨ノ分ハ平声ナリ。伝燈閣夜多ノ伝ニモ、不忿作レ色ノ語アリ。

という。邵注は邵宝(二泉)の『集註』(卷二十三、送別類)。顧注は顧宸『註解』。蕉中師は大典(一七〇一〜一八〇二)のこと。『冤魂志』については、(注9)参照。伝燈は、『景德伝燈錄』のことか。但し、その卷二、第二十祖闍夜多の伝には見えない。なお、伊藤東涯(一六七〇〜一七三六)の『秉燭譚』卷四には、「不分ノコト」として、

杜詩ニ不分桃花紅勝ル錦、生憎柳絮白ニ於綿ト。不分ヲ子タヒカナト訓シ来ル、ソノ所レ謂ヲシラス。邵二泉ノ注云、分ハ別也。不レ能ニ分別スル也。又晋山氏抄ニ、顧氏曰、不分ハ即不忿也。正是忿意ト。イツレノ説ニテモ的切ナラサル様ニ覺ユ。コノ語本漢ノ李夫人カ詞ヲ取り本ツク。李夫人曰、不レ分桃花惱人ノ病眼ト。邵註コレヲ引テ曰、不レ別ニ桃李之紅、以ニ其艶洽若レ笑也ト。イツレモ分ノ字ヲ平声ニナシテ解セリ。事文類聚ニ晋ノ庾翼、少カリシ時、手迹玉右軍ト名ヲ齊フセリ。ソノ後右軍カ書進ム。時庾猶不分、与ニ人ニ書曰、小兒輩賤テ家鶏ヲ愛シテ野鶩ヲ、皆字ニ逸少ノ書ト。コノ不分ノ字、即杜詩ノ不分ト同キコトナリ。予謂此自ワカ分在ラシラサルコトナリ。シカレハ不分ノ分ハ去声ニヨミ、自分スト云分ト

同義ナルヘシ。桃花カワカ分ヲ知ラヌト云コトナリ。

と見える。晋山氏については、東涯の『紹述先生文集』卷二十三に「木鐘丈の席、晋山丈の韻を次す」詩があり、『秉燭譚』卷三の「高髻墮髻ノコト」にもその名が見えるが、未詳。あるいは東涯の父、仁齋（一六二七―一七〇五）と交友のあった宇都宮遯庵（一六三三―一七〇九）のことであろうか。その抄が『詳説』を指すとすれば、その内容と合致する。また晋山氏と称するのは、遯庵の遠祖が宇都宮座主と号したことに由来するか。このこと俟考。『事文類聚』は、その別集卷十二、書法部、兒童賤家雞の条に載せるが、不分を不平に作る。

また三浦梅園（一七二三―一七八九）の『詩敵』卷六に、

不分ノ字、杜詩、不分ヲ桃花紅錦ニ錦ミ、生憎ノ柳絮、白レ於レ綿、古來生憎ヲアナニクヤ、不分ニ子タヒカナト訓セリ。邵二泉、分別也。不能分別^{スルコト}也ト云ヨリスレバ、不分ハ、此等ニテ云、メツチャニテアヤナシトモ云ベシ。左右不分ト、音ニテ読ニシクハアラジ。晋山氏抄ニ、不分ノ分ヲ忿ト見テ、不分即不忿也。正ニ是忿意也トイヘバ、俗語ニ好コトヲ不好ト云類ニテ、腹立ヤナド訓ズベシ。

樂天憤^ニ淮寇未^レ平^カ詩、不分ノ氣從^ニ歌裏^ニ發^ス、無明ノ心向^ニ酒中^ニ生^ス。是ハ忿ノ解ニアタルベシ。滄溟、自憐一日成^ニ三賦^ヲ、不分ヲ傍人ノ賜^ニ錦袍^ヲ、徂徠ノ解、猶^レ云^ニ噴^ル也^ト。蓋簪録ニハ、引^ニ事文類聚^ヲ曰、庾翼^ノ書、少時与^ニ右軍^ニ齊^シ名^ヲ。右軍後進。庾猶不^レ分^ト曰、小兒輩賤^ニ家鷄^ヲ、皆字^レ逸^カ書^ヲ。蓋言^レ不^ニ自知^レ分^ト也。分、去声。

という。白楽天の詩は、『白氏文集』卷十六「元和十二年、淮寇未だ平ららず。詔して歳仗を停む。憤然として感有り、率爾として章を成す」と題する作。岡村繁・竹村則行『白氏文集三』（明治書院「新釈漢文大系」第99巻、一九八八年）には、「分は納得する。不分は納得できない憤懣の氣持。当時の俗語。去声」と注する。滄溟は、明の李攀龍（字は子鱗、号は滄溟。一五一四―一五七〇）のこと。ここに挙げるのは、その七絶「殷正甫内翰の京に之くを送る」十首の其七。徂徠の解は、荻生徂徠（一六六六―一七二八）の『絶句解』（滄溟七絶三百首解）二巻のことで、その巻下に収め、「去声、音忿。猶云噴也」と注する。『蓋簪録』は、伊藤東涯の著。その卷三に見える。

（注8）『世説新語』のこと。明の王世貞が刪定した『世説新語補』に対して言う。その文学篇に見える。『夜航詩話』卷三の「不分」について述べた箇所にも引く。

（注9）顔之推（五三一―五九一）の『冤魂志』に載せる「太楽の伎」（『法苑珠林』卷六七、『太平広記』卷一九に引く）。なお、『還魂記』と言えは、ふつうは元・湯顯祖『牡丹亭還魂記』のこと。東陽の記憶違いであろう。これも、『夜航詩話』卷三の「不分」について述べた箇所にも引く。

（注10）邵宝『集註』及び薛益『分類』（卷二、別送）に「漢の李夫人病より起つ。桃花の盛んに開くを見て悦ばず。武帝、其の故を問ふ。李が曰く、不分桃花錦の如くして人の病眼を悩ますと。帝、其の花を去る」と。『分類』は宇都宮遯庵の増広本に、『集註』は詳説に挙げる。

（注11）ちなみに、三浦梅園『詩敵』卷六には、（注7）に挙げた箇所が続いて、生憎生怖ノ生ハ、生人ノ生ト見エタリ。生ハ熟ニ対スル字ニテ、生人トハ平生慣ザル人ノ事也。生憎生怖モ其意ニテ、平生意ニタクハヘテ、然思フニハ非ザレドモ、不図サシカ、リテ、アナニクヤアナ怖ロシト思ヘル也。

と説くが、東陽の解釈の方がよい。なお、張相『詩詞曲語辭匯釈』卷二「生」の条には「猶偏也、最也、只也、硬也」という。

（注12）顧宸『註解』に「桃花柳絮は、本と悦ぶ可きの景。曰く、（紅錦に勝る）、（綿より白し）と、益々其の悦ぶ可きを見はず」と。宇都宮遯庵の両著に挙げる。

（注13）『春望』詩（詳註巻四）の領聯。

（注14）羅大経『鶴林玉露』地集に「杜陵の詩に云ふ、（不分桃花紅錦に勝る、生憎柳絮綿より白し）と。初めて読むに只だ童子属対の語に似たり。反つて細かに之を思ふに及び、乃ち路侍御が入朝するを送る。蓋し（錦）（綿）は皆有用の物にして（桃花）（柳絮）は乃ち区々の顔色を以て之に勝る。亦た猶ほ巧言令色を以て君子に勝るがごときなり。侍御は邪正を分別するの官、故に此れを以て之に告ぐ。（不分）（生憎）の語を觀れば、其の剛正邪を疾むこと見る可し矣」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

（注15）風人は、もと『詩経』国風の作者の意。例えば、『文選』卷三十七、三国魏の曹植「親親を通せんことを求むる表」に「是を以て雍雍穆穆、風

人之を詠ず」とあり、五臣注に「風人は詩人なり」と。

〈不分〉は、俗語。分は忿と通ずる。豈の字を加えて看よ。忿りにたえないことを言うのである。『古世説』に「于法開、支公と名を争ふ、後精漸く支に帰す、意甚だ不分」、顔之推『還魂記』に「昔枉げて殺さる、実に不分する所」とあり、いずれもはなはだ憤る意。けだし六朝の語であろう。注釈家には李夫人の語なるものを引く者がいるが、これも僞蘇の杜撰だ。〈生憎〉も、俗語。〈生〉は、はなはだの意。すべて生怕・生嫌・生恨という場合、いずれもそうである。二句は〈別筵〉の光景で、結句の〈春色無頼〉、〈愁人に触忤〉するものにほかならない。けだし〈桃花〉は〈錦〉かと思ふ紛うし、〈柳絮〉は〈綿〉を飄しており、本来ならば気に入るはずの景色なのだが、されど〈愁人〉は景に触れて情を傷め、いわゆる「時に感じて花に涙を濺ぐ」のである。今わが別れを悲しむことのひとしおなるときに、彼奴は人の恨みなどおこまいなしに、生き生きと嬉しげに色を逞くして咲き誇っており、却って人に向って自慢しているかのようである。それゆえ〈不分〉〈生憎〉という。その無情を怨み罵るのである。『鶴林玉露』に云う、「初め読むと、ただ童子が作った属対の語のようであるが、細かに思案してみても、小人が巧佞をもつて君子に勝つことを喩えたものだ、やつと分かった。侍御は邪正を分別する官であるから、それでこのことを告げたのだ」と。それが童子の見方に似ているのをまったくご存じない。これはかえって感情が極まった言葉なのだ。宋儒の屁理屈や穿鑿ぶりには、風人の義を失うことが多い。

劔南春色還無頼 觸忤愁人到酒邊

唐分三天下^(注16)爲二十道^(注17)。蜀中^(注18)曰劔南道。春色ハ即指桃花柳絮。特ニ曰劔南春色ト、嘆異郷也。凡用地名ヲ、取テ其字面ヲ湊合ス詩意ニ。讀者審レ諸。無頼無頼藉一也。因罵惱人者曰無頼。韋曲花無頼、家家惱殺人、亦是也。春色ハ

可ニ娯レ人ヲ而反テ引レ愁マ、故ニ曰還テ無頼ト。酒筵ハ原是歡會、今以レ恨別合テ愁、悽然。花絮乃飄ニ落于宴間ニ、以忤レ心ニ觸レ愁ニ、令人ヲシテ不^(注19)勝感愴ニ、何ソ其レ無頼ナル也。感景恨物ヲ、鍾情之甚也。顧修遠云、此詩正ニ從ニ相反スル處ニ形ニ出テ親情ヲ。首ニ曰四十年、乃消息茫然、則時雖多ト而會期無^(注20)幾モ也。本喜今日之相逢、乃先^(注21)レ之ニ以ニ後會無^(注22)レ地、則自^(注23)レ此以往、又不知^(注24)レ幾何年ニシテ始^(注25)レ得^(注26)レ會スルコトヲ也。桃花柳絮ハ、正ニ堪^(注27)レ佐ニ歡會之筵ヲ、乃見^(注28)レテ之而憎ミ、觸^(注29)レテ之而愁。春色無頼、此會益増ク無頼也。對^(注30)スル酒ニ即可^(注31)レ消愁マ、乃酒邊皆愁、有^(注32)レ觸^(注33)レテ皆忤、舉^(注34)レテ目^(注35)是離恨別緒也。寫^(注36)ニ出^(注37)テ童禪ヨリノ親情ヲ、諒然慘然。

(注16) 邵宝「集註」に「劔南は、唐天下を分かちて十道と為す。九を劔南道と曰ふ、薛益「分類」に「劔南は、唐の太宗貞觀元年三月、天下を分かちて十道と為す。九を劔南道と曰ふ」と。宇都宮遼庵の増広本に、「集註」は詳説に挙げる。

(注17) 「夜航詩話」卷三に「無頼は、本と聊頼する所無きを謂ふなり。史記高祖本紀に、大人常に臣を無頼にして産業を治むる能はずすと。陳の徐陵の烏棲曲に、唯だ憎む無頼汝南の雞、天河未だ落ちず猶ほ争ひ啼くと。此れ罵辞と為す。後世因つて転じて懷を為し難きの辞と為し、亦た愛す可きを以て憎む可きの意と為す」として、(注18)に挙げた「韋曲花無頼、家家人を惱殺す」の句およびこの「劔南の春色還つて無頼、愁人に触忤して酒辺に到る」の句を例に引く。徐陵の「烏棲曲」は、『玉台新詠』卷九に載せる。

(注18) 「鄭駙馬に韋曲に陪し奉る」二首の其一(詳註卷三)に、

韋曲花無頼 韋曲 花無頼
家家惱殺人 家家 人を惱殺す
綠樽須盡日 綠樽 須らく日を尽くすべし
白髮好禁春 白髮 好し春に禁ふるに
石角鉤衣破 石角 衣を鉤して破り
藤枝刺眼新 藤枝 眼を刺して新たなり
何時占叢竹 何時 叢竹を占め
頭戴小烏巾 頭 小烏巾を戴かん

（注19）顧宸『註解』。宇都宮遷庵の両著にも挙げる。但し、いずれも「桃花柳絮」の四字を「桃紅柳白」に作る。

唐は天下を分けて十道とし、蜀中を劍南道という。「春色」は、とりもなおさず「桃花」「柳絮」を指す。わざわざ「劍南の春色」というのは、異郷を嘆ずるのである。すべて地名を用いる場合、その字面を取って詩意に適合させる。読者はこれをしかと心得よ。「無頼」は、頼藉無しである。そこで人を悩ますものを罵って「無頼」という。「韋曲花無頼、家人を悩殺す」というのも、やはりそうである。「春色」は、人を娛しませるもののに逆に愁いを引き出す、それゆえ「還つて無頼」という。酒筵は元来がうちとけた楽しい集いであるのに、今では別れを恨むために愁いを含んで悽然としている。

「花」や「絮」はかえつて冥間にひらひら舞い落ち、心に「忤」い愁いに「触」れて、人に感傷にたえなくさせる、なんとその「無頼」であることか。景色に心感じ物に恨み、やりきれない感情が集まること甚だしいのである。顧修遠が云う、「この詩はまさに相反するところから「親」しみの「情」を表している。冒頭に「四十年」というが、かえつて「消息」は「茫然」としている。とすれば過ぎた時間は多いとはいえ、会う機会はいくばくもなかったのである。本来なら今日のめぐりあいを喜ぶはずなのに、かえつてそれより先に「後会」の「地」がないことをいう。とすればこれ以降、幾年たつたら会えるのか分からないのである。「桃花柳絮」は、まさにうちとけた楽しい集いの「筵」に興を添えることができるはずなのに、かえつてこれを見て憎み、これに触れて愁える。「春色」は「無頼」であつて、この集いはますます「無頼」を増すのである。酒に向き合えばすぐさま愁いを消せるはずなのに、かえつて「酒辺」は何もかも愁わしく、「触」れるものすべて「忤」い、目を挙げて眺めれば別離の恨みや悲しみの情を引立てるものばかりである。「童穉」よりの「親」しみの「情」を写し出して、なごやかに諷然としつつも心

痛めて慘然としている」と。

050 又送辛員外^一

本集^二有^下惠義寺ノ園^ニ送^ニ辛員外^一七言絶句^上。此乃續^テ作、故^ニ云^ニ又^一送^ト。惠義寺^ハ在^ニ梓州^一郫縣^ノ長平山^ニ。公數^ク遊^ニ于此^一。詩見^ニ集^中。故^ニ爲^レ爲^レ辛^カ借^テ其^ノ園庭^ヲ設^テ宴^ヲ餞送^ス。蓋^シ賞^ニ美^シ景^ヲ也。

（注1）詳註卷十二。「惠義寺の園にて辛員外を送る」詩は、次のとおりである。

朱纓此日垂朱實 朱纓 此の日 朱実を垂れ

郭外誰家負郭田 郭外 誰家ぞ郭田を負ふ

萬里相逢貪握手 萬里相逢うて握手を貪り

高才仰望足離筵 高才仰望 離筵足る

なお、鈴木虎雄訳注『杜少陵詩集』は、「辛員外を送る」二首について、いずれも「恐らくは贗作ならん」という。これは、朱瀚・仇兆鰲の説に拠るもの。

（注2）『集千家註』卷九「李梓州・王閬州・蘇遂州・李果州四使君に陪して惠義寺に登る」詩の題下の注に「按ずるに地理志に惠義寺長平山は梓州の郫県の地に在り」と。宇都宮遷庵の両著に指摘。郫県には梓州の治所が置かれていた。なお、宋開玉『杜詩釈地』（上海古籍出版社、二〇〇四年）に拠れば、惠義寺は、今の名を琴泉寺という。

（注3）詳註卷十二に、「李梓州・王閬州・蘇遂州・李果州四使君に陪して惠義寺に登る」、「章留後に陪して惠義寺に嘉州崔都督の州に赴くを餞す」といった詩がある。

本集に「惠義寺の園に辛員外を送る」と題する七言絶句がある。これこそは続けて作ったもので、それゆえ「又た送る」と云う。「惠義寺」は、梓州郫県の長平山にある。公はしばしばここに遊んだ。詩は集中に見える。わざわざ辛員外のためにその園庭を借りて宴を設け餞別した。けだし美景を賞したのであろう。

雙峯寂寂對^ニ春臺^一 萬竹青青照^ニ客杯^一

詩家多^ク以^テ雙峰^ヲ稱^ス寺^ヲ。亦^レ雙林^ノ雙樹^ノ之^レ意^也。此蓋^シ其^ノ地^ニ有^ニ兩高

峰、與寺相對也。積土爲高。曰臺。園中有臺時春、故曰春臺。即于此餞辛也。次、句言美竹萬竿、使爽然也。

(注4) 中唐・郎士元「錢起が秋夜、靈台寺に宿して寄せらるるに贈る」詩(唐詩選 卷五)に「更に憶ふ双峰の最高頂、此の心故人と同じうせんことを期す」とあり、『唐詩集註』に「且つ詩家多く双峰を以て寺を稱す。豈に双樹・双林の類か」といふ。双樹・双林は、娑羅双樹。転じて、寺院をいふ。なお、郎士元の作は、『全唐詩』卷三四八に、詩題を「精舍寺に題す」とし、「一に(王季友が秋夜、靈台寺に宿して寄せらるるに酬む)に作る」と注する。

(注5) 例えは、『左氏伝』哀公元年の杜預の注に「土を積み高きを為すを台と曰ふ」と。

詩家は多く(双峰)の語で寺を稱する。やはり双林・双樹の意であるか。これはけだしその地に両つの高い峰があつて、寺と向かい合っているのである。土を積んで高くしたのを(台)という。園中に台があり時は春であるので、それで(春台)という。ほかならぬこの場所で辛員外を餞したのである。次の句は、万竿の美竹が人を爽快にさせることを言うのである。

細草雷連侵座軟 殘花悵望近人開

※細草…カラシバ 殘花…スガレバナ 近…ナツイテ

侵座言若故若進供茵然。近猶親也。此寫臺上別筵之景。春臺惜別雷連。細草供座。軟可坐。殘花向人獻媚相慰。無情之物、亦自依依。豈恨別之切。花草感情耶。亦癡情之至、作如是觀也。草侵座花近人、正園庭之宴。

(注6) 顧宸『註解』に「細草本と無情の物、此に当たつて留連するが若く(座を侵す)は、ことさらに進んで敷物に供することくであるのを言ふ」と。宇都宮遯庵の両著に挙げる。

言う。(近)は、親とほぼ同じ。これは(台)上で催された送別の宴

の光景を写している。(春台)にて別れを惜しみ(留連)していると、(細草)は、(座)に供して(軟)らかく坐ることができる。(殘花)は、人に媚を獻じて慰めてくれる。無情の物も、やはりそれ自体名残惜しげである。別れを恨むことの切なるのは、(花)や(草)も情に感ずるのであるか。やはり痴情の至りで、このような見方をしているのである。(草)が(座を侵)し、(花)が(人に近)づくのは、まさしく園庭の宴ならではた。

同舟昨日何由得 竝馬今朝不擬回

※不擬回…モドリジタクセズ

此言不忍別之況。同舟言前日與辛爲泛江之遊。

何由得甚喜其幸也。本集此篇之前有泛江送客五言律詩、豈是耶。蓋此別或恐終天同遊之歡、不可再得、故特幸之也。擬猶欲也。今朝竝馬相送、至此設宴餞之、坐惜佳會難再、戀戀不能回也。此所以直到綿州也。

(注7) 顧宸『註解』に「下の四句は、別るるに忍びざるの況を言ふ」と。宇都宮遯庵の両著に挙げる。

(注8) 「江に泛び客を送る」詩(詳注卷十二)は、次のとおり。

二月頻送客 二月頻りに客を送る
東津江欲平 東津 江平らかならんと欲す
烟花山際重 烟花 山際に重く
舟楫浪前輕 舟楫 浪前に輕し
淚逐勸杯下 淚は勸杯を逐うて下り
愁連吹笛生 愁は吹笛に連りて生ず
離筵不隔日 離筵 日を隔てず
那得易爲情 那んぞ情を爲し易きを得ん

(注9) 今朝は、朝だけに限らず今日一日の意。当時の俗語。

これは別れるに忍びないありさまを言う。(舟を同じうす)は、前日に辛員外と舟を浮かべて遊んだことを言う。(何に由つて得たる)

は、はなはだその幸運を喜ぶのである。本集では、この篇の前に「江に泛び客を送る」と題する五言律詩があり、これがそうであろうか。けれどここで別れると、あるいは恐らく一日中ずっと一緒に遊びまわる欲びが、もう二度とは得られないので、それゆえ特にこれをもつけの幸いとするのである。〈擬〉は、欲とほぼ同じ。〈今朝〉〈馬を竝べ〉で相送り、ここにやって来て宴を設け餞けをする。佳会の再びは得がたいのが何となく惜しまれ、恋恋として〈回〉ることができないのである。このことが〈直に綿州に到る〉ことになる理由なのだ。

直ニ到テ綿州ニ始テ分テハ首ヲ 江頭樹裏共ニ誰ト來

※直：ズット 共誰來：ヒトリスゴ

公送レテ辛ヲ自レ梓至レ綿ニ、此預道ニ臨レ岐ニ之恨一ヲ。從レ此伴送テ直ニ到ニ綿州ニ而相別ニ矣。君已ニ別去リ、我則獨回ル。江頭樹裏、竝レ轡ヲ之路、匹馬蕭蕭、共ニ誰ト相伴ニ耶。蓋久客不レ能歸ト而送ニ故人ノ還ラレ郷ニ、纏綵網繆之切ナル、眞ニ下黯然銷魂不レ能ニ自持ニスル者上。分首一ニ作ニ分手ニ。或ヒト云、分首ハ承ニ上ノ竝ラレ馬ヲ來、言ニ馬首相分ルヲ、不レ可レ改已。

(注10) 宇都宮遷庵の詳説に「言ハ是ヨリ直ニ綿州ニ至テ、彼地ニテ始テ相別レバ、辛員外ハ、先ヘ可レ被レ行、我ハ江頭ノ樹木ノ裡ヲ誰ト共ニカ帰來ン。独スゴクト帰ント也」。

(注11) 蕭蕭は、馬のさびしげに嘶く声。例えば、李白の「友人を送る」詩（『唐詩選』卷三）に「手を揮つて茲自り去れば、蕭蕭として班馬鳴く」と。

(注12) 顧宸「註解」に「公、員外に于いて纏綵網繆此の如し。真に黯然として魂を銷し自ら持すること能はざる者有るか」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。纏綵は、離れずよりささま。網繆は、まといつくさま。いずれも疊韻の語。梁・江淹の「別れの賦」（『文選』卷十六）に「黯然として魂を銷する者は、唯だ別れのみ」と。

(注13) 輯註（卷十）に首字の下に「一に手に作る」と注する。宇都宮遷庵の

増広本に挙げる。

公は辛員外を見送つて梓州より綿州に至ったが、ここではあらかじめ岐路に臨む恨みをいう。これから一緒に見送つて（直ちに綿州に到つて）別れるとしよう。君がもう別れて去つてゆくと、私はひとりもどるようになる。〈江頭樹裏〉のともに手綱をとつた路には、馬が蕭蕭とさびしげに嘶き、〈誰と共に〉一緒しようか。けれど久しく異郷に客となつたまま帰ることができずにいるのに友人が故郷にもどるのを見送るのは、心が残り思いがからみついて離れず、まことに気分暗澹として悄気こみ、平静を保てず自制できないことがあつたであろう。〈分首〉は、一に〈分手〉に作る。ある人が云う、「〈分首〉は上の〈馬を竝べて〉を承けており、馬首が分れるのを言う。改めてはいけないのだ」と。

051 九日

廣徳元年、重テ梓州ニ時ノ作。公去年秋、始テ來ニ梓州ニ、遂ニ住ニ射洪南之通泉ニ。是歳春往ニ漢州ニ、秋往ニ閬州ニ、尋復回ニ梓州ニ。身世飄蕩、感レ時ニ傷レ心ヲ。所ニ以有ニ此作一也。

(注1) 顧宸「註解」に「廣徳元年、梓州の作」と。

(注2) 明・単復の年譜、宝応元年（七六二）の条に「十二月、射洪南の通泉に住す」とあり、その翌年の廣徳元年に「公、梓州に在り。春間、漢州に往き、秋に閬州に往き、冬晩、復た梓州に回る」と。訳注稿（一）、「杜文真公伝」では、それを踏まえて「宝応元年、……徐知道反し、蜀乱る。因つて梓州に入り、冬、成都に回る。……明年、漢州及び閬州に往き、冬、梓に回る」という。四川省文史研究館編『杜甫年譜』（四川人民出版社、一九五八年）に拠れば、閬州への道中の作。

廣徳元年（七六三）、重ねて梓州にいた時の作。公は去年の秋、始めて梓州にやって来て、そのまま射洪の南にある通泉県に住んだ。この歳の春に漢州に往き、秋には閬州に往き、ついで再び梓州にもどった。あてどないさすらいの身とて、時に感じ心を傷める。この

作があるゆえんである。

去年登^レ高^ニ鄴縣^ノ北 今日重^テ在^ニ涪江^ノ濱^ニ

※重^ニ：マタシテモ

九日登高[、]費長房^カ故實[。]鄴縣^ハ梓州^傍郭^之縣[。]涪江^見前[。]公去

年九日在^ニ梓州^ニ、今秋又重^テ來^ニ于此^ニ、僻地^ニ爲^レ客[、]兩^々經^ニ重

九[、]感^シ其^未歸[、]而百憂^交集[、]悲可^レ支耶[。]

(注3) 邵宝『集註』(卷二十三、時序類)及び薛益『分類』(卷二、節序)に

「高きに登るとは、費長房、桓景に謂いて曰く、汝が家、九日に當に厄有るべし。宜しく絳紗囊を作り、茱萸を盛つて臂に繫げ、高きに登って、菊花酒を飲みて之を避け、纒かに免る可し。其の言の如くす。家に還れば雞犬牛羊皆死す。後人此に沿つて節日と爲し、以て樂しみを取る」と。

「分類」は宇都宮遯庵の増広本に、『集註』は詳説に挙げる。なお、費長房の故事は、もとは『統齊諧記』に見える。

(注4) 邵宝『集註』及び顧宸『註解』に「鄴県は梓州に属す。傍郭の県なり」と。

(注5) 046「野望」詩の詳解に「涪江、源は西羌に出づ。州の東南自り射洪江に合す」と。

(注6) 「九日梓州城に登る」「九日嚴大夫に寄せ奉る」と題する五律(詳註巻十一)がある。

(九日)〈登高〉は、費長房の故事。〈鄴県〉は、梓州傍郭の県。〈涪江〉は、前に見える。公は去年の九日梓州にいたが、今秋また(重ねて)ここに来ており、僻地に〈客と爲〉っている。二度も重九を迎えて、いまだ故郷に帰れずにいることに心感じて、くさぐさの憂いがこもこも集まる。悲しみに身を支えきれようか。

苦^ム遭^フ白髮^不三^相放^サ 羞^見菊花^無數^新

※苦^ニ：ニガ^クシ 羞^見：メンボクナイ 無^数：カズカギリモナク

不^ニ相^放猶^レ言^不饒[。]杜牧^詩三^公道^世間^唯白^髮、貴^人頭

上^ニ不^ニ曾^テ饒[、]似^下從^ニ公[、]此^句一^化出^上。無^數、言^ニ菊^叢之

盛^ナ、有^ニ三^大照^人之^意。以^ニ蕭^索、衰^髣對^三爛^漫、美^花、自

差^ニ形^穢、不堪^レ見^レ照。且^彼得^レ時^マ競^レ色[、]我^ハ則^失路^ヲ落^魄、

乃^強顏^對花^ニ、得^レ無^レ見^レ笑^乎。所^ニ以^レ羞^レ見^{コト}也。顧^註ニ云[、]

白^髮黃^花本^屬常^景、妙^ハ在^下以^ニ苦^遭不^レ放^サ羞^見無^數諸[、]

俚^俗ノ字^ヲ變^シ成^ス奇^意也。

(注7) 薛益『分類』に見える。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注8) 宇都宮遯庵の詳説に「不^ニ相^放トハ、貴人頭上^不曾^テ饒^ト云^ト意^同」

という。晩唐・杜牧(八〇三〜八五三)の詩は、「隱者を送る」(『樊川詩

集』卷四)と題する、次の作。

無^媒逕^路草^蕭蕭 無^媒の逕^路 草^蕭蕭

自^古雲^林遠^市朝 古^自り雲^林 市^朝に遠^さかる

公^道世^間惟^白髮 世^間に公^道なるは惟^だ白^髮

貴^人頭^上不^曾饒 貴^人頭^上にも曾^テ饒^さず

なお、この詩は『三体詩』卷一に許渾(七八八〜八六〇?)の作として収む。但し、許渾の詩集『丁卯集』には、見えない。

(注9) 顧宸『註解』。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

〔相^放さず〕は、饒^さずと言^うのとはほ同じ。杜牧の詩に「世間に公道なるは唯だ白髮、貴人頭上曾て饒^さず」とあり、公のこの詩から化して出たようだ。〔無^数〕は、菊叢の盛んなのを言い、大いに人を照らし出す意がある。うらぶれた衰鬢をもつて爛漫と咲き誇る美しい花に向き合^うと、自ら爺むさい姿を〔羞〕じて、照らし出されるのにたえない。その上そいつは今を盛りと時めいて色を競っているのに、自分はいえは路を見失^つて志を得^ずに落魄している。かえって無理やり顔をつくる^つて花に向き合^つても、笑われ^ずにすまされようか。〔見^ることを羞^つ〕るゆえんである。顧註に云^う、「白髮や黄花は本来ありふれた景色に属するが、妙は(遭^フを苦しむ)〔放^さず〕(見^るを羞^つ)〔無^数〕といった俚俗の字で奇抜な意味に変化させていることにある」。

世^亂鬱^鬱久^シ爲^レ客^ト 路^難シテ悠^悠常^ニ傍^レ人^ニ

※悠^悠：ブラ^ク

上二下五ノ句法。史記高祖紀(注10)ニ、安^レ得^レ鬱鬱^{トシテ}久^ク居^{コトヲ}此^ニ乎。鬱鬱ハ憂悶ノ貌。路難ハ謂^フ世途ノ艱難ナルヲ。樂府ニ有^リ行路難(注11)。悠悠ハ長遠之意。此言^フ漂泊無^レ定^ト。傍^レ人^ニ不^レ能^ク獨立^{コト}也。此二句乃所^リ以^テ鬢化^ニ白髮^ニ眼羞^ニ黃花^ニ也。

(注10) 薛益「分類」に「漢の高祖に、安んぞ鬱鬱として此に居るを得んや」と。宇都宮遼庵の増広本にも挙げる。なお、『史記』は、高祖本紀ではなく、淮陰侯列伝に見える。

(注11) 宋・郭茂倩『樂府詩集』卷七十の雜曲辭十および卷七十一の雜曲歌辭十一に、南朝宋の鮑照以下の「行路難」を収める。

(注12) 薛益「分類」に見える。宇都宮遼庵の増広本にも挙げる。上二下五の句法。『史記』高祖紀に「安んぞ鬱鬱として久しく此に居ることを得んや」と。〈鬱鬱〉は、憂悶のさま。〈路難〉は、世途の艱難なること。樂府に「行路難」がある。〈悠悠〉は、長遠の意。ここでは漂泊定まりなきことを言う。〈人に傍ふ〉は、他人の世話になつていて独り立ちすることができないことである。この二句こそ、鬢が〈白髮〉になり眼のあたり黄花に〈羞づ〉るゆえんである。酒闌(注13)卻憶十年ノ事 腸斷驪山清路ノ塵

※闌：シマヒギハ 清路：オナリミチ

酒闌ハ宴將^レ散^セト也(注13)。十年ノ事、謂^フ十年前天寶太平之時^ヲ。驪山

反^テ對^ス鄭滂^ト。明皇驪山ノ離宮、每^ニ十月臨幸^シ、至^リ歲晚^ニ乃^チ還^ル。

疑^クハ九日嘗^テ幸^シ、公或^ハ扈從^セ也。御路^ヲ曰^フ清路^ト。凡^ソ言^フ清禁清

問^ト、天子之事皆以^テ清稱^ス之^ヲ。曹植七哀^ニ、君^ハ若^ク清路ノ塵、

妾^ハ若^ク濁水ノ泥^ト。此謂^フ當時清蹕之路、行塵之揚、俯仰繁盛之

狀^ヲ。蓋公因^テ佳節^ニ、登^レ高^ニ置酒^シ、遣興^ヲ自慰^ス。既^ニ而飲罷^テ、

悵然^{トシテ}相感^シ、追^テ思^フ先帝驪山ノ遊幸^ヲ、誠^ニ爲^リ太平ノ盛事^ト、今

已^ニ二十年、恍惚^{トシテ}如^ク夢^ト、不^レ可^ク再^レ見^ル、凄其^{トシテ}欲^ク絶^レ也。此

東坡^ノ所^レ云、流落饑寒、終身不^レ用^ラレ、而一飯^モ未^レ嘗^テ忘^レ君^ヲ也。

(注13) 何か基づくところあるのか、不明。ちなみに、宇都宮遼庵の両著に「史記高祖本紀に酒闌の註に、文類が曰く、闌は希を言ふなり。謂ふこ

は酒を飲む者半ばは罷め半ばは在り、之を闌と謂ふ」と。

(注14) 『文選』卷二十三。

(注15) 顧宸『註解』に引く明末清初の李望石(名は贊元。一六二四～一六七八)の語に「首を回らせば十年恍惚として夢の如く、驪山の遊幸、太平の盛事、再び見る可けんや。吾れ〈夜半醒め来たり蠟燭紅なり、一枝の清淚珊瑚を湿ほす〉の句を誦する毎に、為に凄其として絶えんと欲す。然れども〈酒闌〉の二字含蓄限り無きに如かず」と。宇都宮遼庵の両著

にも挙げる。〈夜半〉の句は、出処不明。〈凄其〉は、『詩經』邶風・緑衣に「絺や綌や、凄として其れ以て風ふく」とあるのに基づく語。

(注16) 北宋・蘇軾「王定国詩集叙」。訳注稿(一)、「杜文貞公伝」の(注84)参照。

〈酒闌〉は、宴がはてようとするのである。〈十年の事〉は、十年前の天宝年間、天下太平の時をいう。〈驪山〉は、〈鄴〉〈浩〉と反對(注16)。明皇(玄宗)は(驪山)の離宮に、毎年十月になると臨幸され、歳暮になつてやつともどられた。ひよつとすると(九日)にかつて行幸されたことがあつて、公もあるいは扈從したことがあつたのかも知れない。御成道を(清路)という。すべて清禁・清問と言うように、天子の事はみな(清)字でこれを称する。曹植の「七哀」に「君は清路の塵の若し、妾は濁水の泥の若し」と。ここでは当時清蹕の路に、行塵が揚り、どこもかしこも繁盛していたありさまをいう。ただし公は佳節であるので、登高置酒し、憂さ晴らしをして自ら慰めた。やがて宴飲がおわり、悵然として心感じ、先帝の(驪山)の遊幸を追思するに、まことに太平の盛事であつて、今はや(十年)ほんやりとして夢のようで、もう二度とは見ることができず、凄愴としてむらぎもの絶えんとするのである。これは東坡が云う「流落して飢えや寒さに苦しみ、生涯用いられることがなかつたにもかかわらず、一椀の飯食う間でさえいまだかつて君恩を忘れなかつた」というものである。

前稿補訂

* * *

『杜律詳解』 訳注稿(一) (『文化と情報』 第三号)

18頁上段19行 『杜律注解』 ↓ 『杜律詳解』

26頁下段25行 江に枕して ↓ 江に枕んで

32頁下段6行 江に枕し ↓ 江に枕み

『杜律詳解』 訳注稿(二) (『文化情報学部紀要』 第一巻)

53頁上段21行 可_レ以_レ泣_二鬼神_一 ↓ 可_レ以_レ泣_二鬼神_一

『杜律詳解』 訳注稿(三) (『文化情報学部紀要』 第二巻)

154頁下段10行 やはりしばしばである。の下に、意見具申の方途が塞がれて

いたことが分かる。という一文を補う。

『杜律詳解』 訳注稿(六) (『文化情報学部紀要』 第五巻)

183頁下段8行 伝わらず ↓ 伝はらず

184頁上段15行 垂_ハ将_レ及_二グンド也_一 ↓ 垂_ハ将_レ及_二グンド也_一

なお、訳注稿(六)、033「裴廸蜀州の東亭に登つて客を送り早梅に逢つて相憶うて寄せらるるを和す」詩の(注14)に引いた『夜航詩話』巻四の記事に見える『明一統志』について、『大明一統志』には見いだせなかったが、これは或いは明・曹学佺『大明一統名勝志』を指して言うのかも知れない。その「南直隸名勝志」巻十六、揚州府江城県の条に「旧志に載すらく梅花閣有り何遜を以て名を得と。按ずるに遜、字は仲言。東海刻の人。梁の水部員外郎たり。集中に揚州法曹梅花盛んに開く詩有り、……(略)と云ふ。其の結句を味はへば、則ち遜、當時是れ偶たま法曹に過りて来たる、法曹に仕ふるには非ざるなり」云々とある。

(二〇〇六・九・一八初稿)

(二〇〇六・一一・一〇補筆)

このみや・としひろ / 文化情報学部教授

E-mail:miomiya@sugiyama-u.ac.jp